

光輪の侍は平穩を望む

レイ 1020

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦国の世。継国家には忌み子とされる継国縁吉と後継の継国巖勝。そしてその下にもう一人、二人に勝るも劣らない才を持った侍がいた。名を継国昌継という。

妻子に恵まれ、鬼狩りをしつつ幸せな日々を過ごしてきた刹那、突如として現れた異彩を放つ鬼によってどこかの地に家族ごと飛ばされてしまった昌継。そして気がつくところは、自身が生きていた場所（時代）とはまるで違って……。

生存キャラ多数存在します！話の流れは原作通りですが、一部は乱れがあると思います。あらかじめご了承ください。

目次

原作前

其ノ壹	日輪と光輪	2
其ノ貳	見知らぬ地と時代	11
其ノ参	未来の鬼	25
其ノ肆	鬼ならざる鬼	32
其ノ伍	受け継がれた血	43
其ノ陸	派生の呼吸	59
其ノ漆	修行の成果	70
其ノ捌	思わぬ邂逅	82
其ノ玖	光と月	92
其ノ拾	産屋敷耀哉	101
其ノ拾壹	久しき者達	113

其ノ拾貳	実力の差	123
其ノ拾参	和解、そして……	132
其ノ拾肆	一本橋での激闘	145
其ノ拾伍	激闘の行方	156
其ノ拾陸	帰参……そして新たなる戦	169
いへ		177
登場人物紹介		177
原作編		
其ノ拾漆	激闘 継国昌継 対 鬼舞	184
辻無惨		184
其ノ拾捌	妹の変貌	193
炭治郎の決意		205

原作前

其ノ壺 日輪と光輪

私は……平穩で穩やかに過ごしたいのだ。なのに……目の前にいるこの異物どもが邪魔をする。なぜだ？なぜ邪魔をする？なぜ私の“大切なもの”を取り上げようとする？

「消え失せるがよい。今ならば見逃そう……」

「ケツケツケ！そうはいかんなく!!せつかくうまそんな人間が3人も集まってんだ。逃げる前にお前達を食い尽くしてやるく!!」

「……ならば、消えるが良い。(すう……)」

私は刀を抜き、呼吸を整えた。

「光の呼吸」……………」

私の刀が眩い光を持って輝き始める……………」

「【光閃】！」

「なっ!?消えっ……………」

目の前の異物が何か言いかけた気がしたが、聞くこともなく私は其奴の頸を斬り落とした。斬り落とすと同時に、其奴はまるで焼け落ちるようにチリになって消えていった。

「ふう……………もう大丈夫だぞ。寿々、可奈」

私が優しく語りかけるようにそう言うと、家の中からゆつくりと顔を出した母娘。寿々は私の妻、可奈は私と寿々の子供である。可奈はまだ生まれて間もないこともあって、寿々に抱かれながら静かに寝息を立てていた。

「はあ……。毎度毎度すみません昌継様」

寿々は私の名前を言いながら、申し訳なさそうにし、ゆつくりと頭を下げた。そう頭を下げる必要もあるまい……。私はお前達を守るためならばいかなる時も修羅となろう……。その覚悟ができておるのだから。

私の名は継国昌継と言う。歳は二十歳だ。とある剣の名家の末子として生まれ、その際に左上の額部分に奇妙なあざがあったことから、家から追い出されたがいない者だ。私の上には双子の兄上達がいたが、何故か私が九になった頃に片割れの“縁壺兄上”は何処かへと姿を消してしまわれた。縁壺兄上も私同様、額に奇妙なあざがあったことから、おそらく家から追い出されたのだろう。そう考えていた。だが、それは間違いだった。縁壺兄上は自ら家を出たのだ。我が家の名に傷をつけないようにと言う理由で……。それはちょうど、我が母、朱乃が天に召された後のことだった。“巖勝兄上”もその後、何とかして縁壺兄上を見つけ出そうというところを探し回っていたみたいだが、結局は見つからずに諦められたらしい。

私は巖勝兄上も縁壺兄上のことも深く尊敬の意を示していた。お二人は剣技に優れ、どちらかお一人しか跡を継げないのが残念だと言えるほどに凄まじい腕の持ち主であつた。私はそのお二人の姿に惹かれ、私にも剣を教えて欲しいと師範に頼み込んだ。お二人のお達しもあり、私は早速刀の持ち方、振り方、間合いの取り方を師範に教えてもらい、試しに師範と打ち合つてみる事にしたのだが・・・結果として、その師範に勝つてしまったのだ。なぜかは分からないが、打ち合つている際に、師範の身体が透けて見えるようになっていて、それによつて筋肉の動き、血の流れ、肺の膨らみが分かり次の動作が予測できるのだ。それをお二人に話したところ、縁壺兄上にも同じ世界が見えていることと、巖勝兄上には見えていないことがわかつた。

それから、私は縁壺兄上と同じ様に、父上に断りを得て、家を出た。理由は兄上同様、家の名に泥を塗ることを防ぐためであつた。父上は喜んで許可してもらえたが、巖勝兄上は最初は反対していた。だが、私の決意が硬いことを理解されたのか、最後は「達者でな」と言い残し、許可してくれた。

それから私にはいろいろなことが起こつた。まず、家を出て1年後に縁壺兄上と再会

した。縁壺兄上に事情を話したところ、一人で生きるには己を鍛えるべきと告げられ、縁壺兄上とともに、修行を重ねた。その修行により、私たちは呼吸法というものを学び、その呼吸を常に心がけていることで身体能力の向上が望め、疲れにくい身体に仕上がったのだ。そして最後に、その呼吸を剣技に活用出来無いかと縁壺兄上と試行錯誤した結果、縁壺兄上は「日の呼吸」、私は「光の呼吸」を身につけることができた。呼吸を身につけるまでにここまで三年を費やしたが、ここまで来れば後はそれぞれ己を鍛え続けられれば良いと縁壺兄上が言われたため、そこで修行は終わりを迎えた。

『昌継よ。お前は鬼という存在を知っているか？』

『鬼………残念ながら存じ上げませぬ』

縁壺兄上は、修行が終わったかと思うと唐突にそのようなことを聞いてきた。私はその鬼という者は名すら聞いたことが無かったのだ。

『そうか………どうやらその鬼と言う輩どもは人間を好んで食うと聞いた。夜になると活発に活動を始め、人間のいるところへ赴き、老若男女問わず見境なく食い散らか

す……それが鬼の正体であるのだ』

『……なんと卑劣な。兄上……そのような輩は捨ておけませぬ。人という存在は世を明るく照らす灯火のような者。寿命はあり、いずれは死を迎えてしまうがそれでもそれこそが人間の美しさでもあり、儂さでもある。だからこそ、その人を喰う鬼という異物どもは捨ては置けませぬ』

刀の柄を握る手が次第に強くなっている事に私自身も気がついていたが、どうしてもその鬼の存在に不快を覚えてしまい、それを抑える事叶わなかった。

『それは私も同じ事……。鬼が存在している限り、この美しい世に平穩は訪れない。鬼は滅すべき存在なのだ。そこで風の噂で聞いたのが、鬼殺隊と呼ばれる鬼を狩る集団の存在のことだ。その者らは鬼を狩ることを仕事をしているらしく、どうやらその者らは鬼を消滅させうる手段を持っているようなのだ……。』

『……なるほど、つまり縁壹兄上はその鬼殺隊とやらに入れば、鬼を滅す時がより早くなると……。そう仰りたい？』

『その通りだ。まずはそこに向かおう。そこで、その者らとともに、鬼のいない世を作ろうではないか』

『縁壺兄上のご覚悟、しかと見させていただきました。それを見せられてはこちらも腹を決めなければなりませんまい。……縁壺兄上、私も共に鬼を滅し平穏な日々を取り戻しましょう』

『うむ……宜しく頼む、昌継』

それから私たちは鬼殺隊に加わり、それぞれ鬼狩りとして活動を始めた。鬼狩りとなった際に渡された珠鋼と呼ばれる特殊な素材を使って作られた刀を懐に下げ、私はくる日も来る日も鬼を狩り続けた。縁壺兄上とは別行動をし、お互いに鬼を滅すまで顔を合わせないという約定までつけた。不思議な事に私が初めに刀を取った時、刀身が純白に染まったのだが、そつと柄の部分強く握ると今度はその刀身は紅く染め上がった。試しにこの刀で鬼を狩ってみたところ、普通の刀身よりも鬼に入るダメージが大きく、

鬼特有の再生能力も全く効力を持たなくなっていた。

『呼吸にも随分と慣れてきた．．．．．だが．．．．．それで慢心してはならない。私はまだまだ弱い。巖勝兄上や縁壺兄上に比べれば．．．．．』

そんな時だった。寿々と出会ったのは。寿々との出会いは、私が鬼に襲われていた寿々を助けた事がきつかけだった。泣きじやくる寿々を宥めつつ、彼女の周りを見渡すと、そこには二つの遺体が見つかった。【透き通る世界】で二人を観察してみたが既に呼吸も心臓も止まっており、事切れていた。大方、彼女の両親なのだろうと鷹を括っていた。だから私は背中をさすりながらこう言った。

『両親を助けられなくて申し訳ない．．．．．罪滅ぼしとしては拙いかもしれないが、これからは其方のことはどんなことがあっても私が守ろう。そして、いつか其方には鬼のいない、平穏な日々を過ごさせて見せよう』

『．．．．．つぐす。ほ、ほんとに．．．．．?』

『本当だ』

私が少し微笑を浮かべながら再び肯定すると再び寿々は泣き始めた。だがさつきまでの絶望に打ちひしがれたような泣き方ではなく、どこか安心したような……そんな泣き方に私には見えた。

それから私たちは家を構え、共に生活をするようになった。始めは拙かった寿々の家事も四、五年程もすれば、立派にこなせるようになっていた。そして私と寿々が共に生活を始めて六年后、私たちは夫婦となった。それから一年后、寿々は可奈を産み、私は父となったのだ。今までは寿々を守るだけだったが、これからは違って、“寿々と娘の可奈”を私が必ず守るという使命を自分に課していた。

そんな鬼狩りを続けつつも楽しい日々を過ごしていた私たちのもとに、一つの訃報が届いた。それは……縁壺兄上の妻である“うた”が、身籠っていた胎児と共に鬼に殺された事だった。

其ノ弑 見知らぬ地と時代

『成仏して下さい．．．．義姉上。貴女の仇は私と縁壺兄上で討ち果たす故、どうか天から見守つていてください．．．．』

義姉^{うた}上の訃報を受けた私達は、会わないという約定を無視し縁壺兄上の元に向かった。一度、家には赴いたことがあつた為、迷うこともなく着くことが出来た。家に着くと同時に私は寿々と可奈と共に家の裏に埋葬された義姉上に黙禱を捧げた。そんな私たちの傍には同じく黙禱を捧げておられる縁壺兄上の姿もあつた。

『昌継よ。私にはうたと生まれてくる子供の三人で静かに暮らしたいという夢があつたのだ。私は多くは望まぬ．．．．ただそれだけが出来ればよかつた．．．．だが、それさえも鬼によつて奪われてしまった．．．．』

『兄上．．．．』

縁壺兄上は酷く悲しい顔をされていた。縁壺兄上が荒事が好みでないことは重々承知している。それは私も同じこと。私とて好きで刀を振っているわけではない。願うならば刀など振らずとも静かに寿々と可奈と過ごしたいと思っているのだ。だが、鬼が存在している以上、それは叶わぬ願いだ。

『縁壺兄上……無理強いはしませぬ。今は心を落ち着けせるべく休むべきかと……』その間は私が鬼を狩ります故……』

『問題ない。うたの死で私が沈んでしまっていてはきつとうたも浮かばれぬだろう。私は……うたの無念を晴らす為、これからも鬼を狩ろう。昌継……兄のこの我儘を許してくれるか?』

何か気持ちが吹っ切れたかのような表情で私を見据えてくる縁壺兄上に私は心底思ひ知らされた。やはり……兄上は素晴らしき侍であると。私の返答は決まっていた。

『どこまでもお供いたします。共に鬼の始祖、“鬼舞辻無惨”を倒しましょう』

時は今に戻り、私達はそれから家へと戻り、普段の生活に戻った。それからしばらく、我が家の近くで頻繁に鬼が出るようになった為、私は常に刀を持ち歩きいついかなる時

も抜刀できるような心得ていた。鬼殺隊で縁壹兄上が鬼の始祖、平安時代初期ほどから生きていられると言われている。鬼舞辻無惨と遭遇し、ギリギリのところまで追い詰めたが取り逃したと報告を受けたが、それならばいざその始祖を滅することもそう遠くない未来だと、私はそこで少し……常人ではほんの一瞬にしかならない時間だけ生まれて初めて“慢心”をしてしまったのだ……。

「!!昌継様!後ろに!」

「っ………鬼か」

まだ近くはないが、私たちに近づいてくる鬼の存在に気づくのにほんの一瞬遅れてしまったのだ……。まだまだ未熟ということか……。寿々に感謝せねばな。

「……何をしに来た?生憎今は子供が寝ているのでな。早々に退散してもらえると嬉しいのだが?」

「貴様があの方を殺しかけた鬼狩りか?似てる……似てるぞ」

「何を勘違いしてるかは分からぬが、其方たちの始祖を追い詰めたのは我が兄、継国縁壹という鬼狩りだ」

「なるほどなく、だがあの男の血縁ってことは貴様もそれほど強いってことだ！危険……貴様は危険だ……」

「……………」

「この鬼はいつもの鬼よりも随分と饒舌だ……。鬼とこれ以上語る必要も無し……………退散する様子もないことのようにだし、すぐにかたをつけよう……………」

「貴様にはこの時代から消えてもらう！見せてやろう。あのお方から頂いたこの力を！……………」

“血鬼術” 【時空葬送】!!

「……………?」

「昌継様!!」

目の前の鬼が掌をこちらに向けながら何かを叫んだと思つたら、そこから眩い光が私を襲つてきた。何かの攻撃の類かとも考えたが、それは無く何かふわつとした妙な浮遊感が襲つてくるだけで他は何も無かつた。後ろから寿々がこちらに駆け寄ってくる声が届いてきたが、どうにもだんだんとまぶたが重たくなっていくのがわかり、後ろを確認する前に私の意識は深く沈んでいくのだった。

「……………むっ(っ)はど(っ)だっ」

次に目が覚めた時、私は全く知らない土地にいた。先ほどまで妙な鬼と戦っていたは

ずだが、既にその鬼の姿はなく、それに加えて周りの風景や場所も全て変わってしまっていた。

「昌継……様？」

「!? 寿々、可奈。無事であったか……よかった」

私の後ろには御体満足な状態の寿々と可奈の姿があった。どうやら私が眠っている間に鬼に襲われたわけでは無かったようだ。それだけでも安心するべきだろう。

「昌継様。ここは……一体？」

「私にも分からぬ。とりあえず、近くにいる者達から話を聞いてみる事にしよう」

「はい……それにしても、ここは藤の花が綺麗ですね……」

「本当に綺麗だ……」

藤の花が咲き誇る山の中、私達は人を探す為、山の中を散策し始めた。しばらく歩いていると、人の姿らしき姿を確認できたが、近づいてみるとそれは人では無かった。

「・・・・・・・・鬼か。聞くがここはどこだ？」

「げひやひやひくく!!人間よ!その肉食わせろくく!!」

「話す気もないか・・・・・・・・寿々、下がっている」

寿々を後ろに下げさせ、私は刀を抜いた。そして何も言わずにその鬼の頸を斬り落とした。

「あれは……女子か？どこか焦っているように見えるが……」

またしばらく歩いてみると、蝶の簪を髪にこさえた女子に遭遇した。【透き通る世界】で見たところ、かなり疲弊しきっていて、肺の機能も低下していた。何かから逃げているのか？……もしや？

「ぎゃゃ〜〜!!!」

「きゃつ!!」

私の予測通り、鬼が女子に向かって襲いかかった。すんでのところで刀を使って攻撃を防いでいたが、あんな女子でも刀を持っている事に少しばかり驚いていた。……とにかく、ここで死なすわけには行かぬな……

「光の呼吸【円光遮断】」

円形になった光の斬撃が鬼の頸を狩るのが私にもわかる。この型は円形に刀を振る為、腰の力と腕の力が合わさり、どんな鬼の頸だろうと一太刀で斬り落とすことができず、この鬼に使うまでもなさそうであったが、とつきの事に思わず使ってしまったのだ。心を乱すとは……まだまだ精進せねばな……。

「無事であるか？」

「は、はい……えつと、あなたは？」

「名乗るほどのものでもない。聞きたいことがあるのだが、ここは何処だ？」

「ここ？えつ？貴方も最終選別に来たわけじゃないんですか？鬼殺隊の？」

何を言っている？とでも言いたげな表情を私に向けてきたこの女子。鬼殺隊というものも私も入っているあの鬼殺隊のことであろうか？だがおかしい。鬼殺隊に入るのに選別などというものは無かつたはず……入ろうと思えば誰でも入れたものだ。それにこのような女子まで鬼殺隊に入ろうとしているなど……。まで……。

たしかあの時の鬼は、「この時代から消えて貰う」と言っていた。もしや私達は……。

「其方、つかぬ事を聞くが今の世は戦国の世か？」

「戦国？そんなわけ無いじゃないですか。それは三百年前の話ですよ？今は明治時代ですよ？とは言っても、もう時期新しい時代に変わるみたいですけどね？」

「やはり……私達は時代を飛ばされてしまったらしい」

信じたくは無かったが、信じるしかあるまい。この女子が嘘を言ってるようには思えないのもあれば、周りの風景も私たちがいた時代と比べて随分と変わってしまったこともまた、納得の元となっていた。

「昌継様……」

「寿々……どうやら私達は時代を飛ばされてしまったらしい。今の世は私たちが

いた世より三百年も経った未来だそうだ……」

「!? そんな……」

後ろにいた寿々にそう言うのと寿々は信じられないと驚愕の表情を浮かべた。

「あの……そちらの方々は？」

「私の妻と娘だ。私と一緒にここに飛ばされてきたのだ……」

「あの……どう言う意味なのですか？」

私は簡単に女子に説明をした。私達は戦国の世で生きていたこと、そこで鬼を斬つていたこと、妙な鬼にこの時代に飛ばされてしまったことその他私が知っている事を全て説明をし、ようやく女子は納得をしてくれた。

「なるほど……にわかには信じられませんが信じましょう」

「すまない。とりあえずここらは危険だ。鬼が出る。この山から出る事を勧める」

「それはできません。私と言うか選別を受けている隊士はこの山で七日間生き残らなければいけないのです。鬼が出る中で……」

なるほど、その中でも生き残れるほどでないと言いつつ鬼殺隊には入れないと言いつつか……。未来の鬼殺隊の基準は厳しいのだな。

「そうか……では、私達はすぐにこの山を出るとしよう。娘が起きてしまうのでな。もし何か縁があれば……どこかで会おう」

「はい！お元気で！あの……お名前を教えてくださいお願いします！」

「……継国昌継だ」

「昌継さんですね！お元気できつといつかまた会いましょう！私は胡蝶カナエです！覚

えておいてくださいね！」

そう言い残すと、カナエと言った女子は何処かへと消えていった。いずれどこかで会える事を楽しみにしているぞ……カナエ。そのまま私達は、山を降りた。

其ノ参 未来の鬼

私達は山を降りた後、近くの街に来ていた。その街を見て私達は改めて未来に飛ばされてしまった事を自覚したのだった。私たちがいた世には無いような物、召し物、建物などがそこに存在しているのであれば自覚せざるを得ないだろう。

「私たち……これからどうなるのでしょうか？」

「私にもまだ分からないのだ……。ともかく、どこか落ち着ける場所を確保せねばな」

それから私達は当てもなく街を彷徨い、暫くして人気がない静かな平屋の元にたどり着いた。見たところ、外見こそポロポロなれど、居座るには申し分なさそうな家ではある。人の気配も感じぬ故に、私達はここで暫く休ませて貰おうとしたのだ。……………何やら妙な気配を感じるのだがな。

「・・・・・・・・・・うう」

「つ・・・・・・・・・・ごめんね。起こしちゃったかしら？」

「寿々よ、少しここで待っていてはくれぬか？妙な気配を感じるのにな・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・分かりました。どうかお気をつけて・・・・・・・・・・」

寿々の頭に手を乗せ、「すぐに戻る」と言い残し私はこの平家の中に入った。中に入った途端に、私を感じた妙な気配はさらに強くなるのが身に締めてわかった。そして、それに続いて私は気づいた・・・・・・・・・・。

「血」の匂い・・・・・・・・・・もしや？」

嫌な予感がした私は、すぐさま匂いの発生源の部屋に向かった。すると、そこにいたのは二体の鬼と内臓から何まで無残に食い散らかされた人の姿だった・・・・・・・・・・。

「お？この家にはもう一人人間がいたんだな！いいね〜！まだまだ食い足りないところだっただよなく!!」

「てめっ！また横取りする気かよ！今度の獲物はこの俺に譲りやがれっつてんだ!!」

「・・・・・・・・」

鬼どもは何やら言い争っているように見えるが、私にははやそんなことはどうでも良かったのだ。

「いつの世も・・・・・・・・鬼は尊い命を奪い尽くす・・・・・・・・。この者がお前達に何をしたというのだ？」

「はっ？何言つて・・・・・・・・」 「お前達は滅すべき存在だ・・・・・・・・」

私はそのまま二体の鬼の頸を即座に斬り落とした。「人の命を蔑ろにする者に情け

は不要」……縁壺上からの教えである。

「助けられず……すまなかつた。せめて……来世では平穏な時代を過してほしい……」

遺体となった男に黙禱を捧げ、私は寿々達のもとに戻った。

「今戻った」

「ご無事で何よりです。それで……」

「鬼がいたが先ほど始末してきた。だからもう心配はせずとも良い」

「そうですか。良かった……」

それから私は寿々に暫くこの平家に居座る旨を伝え、部屋に案内した。寿々は可奈を産んでまだ一月と経っていない。移動をさせ無理をさせるわけにはいかないのだ。それに加え可奈、生後間もない可奈に負担をかけるのもまず無い。だからこそ私はこの平家で暫く生活する事を話したのだ。

「ともかく今は、私たちの世に戻る手を考えるのが最善であるが、その前に寿々よ……聞いてもらいたい話がある」

平家の一角の部屋に可奈を寝かしつけた後、私と寿々は別の部屋の移り今後の話をしていた。

「はい、なんでしようっ？」

「先ほども言ったように、先ほどこの家には鬼がいた。ここに住んでいたであろう男は既にその者らに食い尽くされていた……」

「はい……そのようですね」

暗く悲しい顔をする寿々。私は寿々にはこのような顔をして欲しくは無かった。いつも笑っていて、いつも通り私と可奈と共に平穏な生活を送っていてもらいたいのだ。……それをあの鬼どもが邪魔をし、寿々を悲しませる。許すべからずな存在なのだ。

「鬼がいるということは、三百年経った今の世であっても鬼の始祖、鬼舞辻無惨が生きているということになる。あやつが生きている限り、幾度となく人は襲われ、命を奪われていく……。私にはどうしてもそれだけは捨て置けぬ……。だから寿々……」

「この時代でも鬼狩りをするのやめたいのではありませんか？……昌継様がやりたいことならば、私は何でも肯定します……。ですが、やはり無茶はいけませんよ？私には、昌継様と可奈が何よりの宝物なのですから……」

「……すまぬな。必ず鬼どもを駆逐させる。そして……終わった暁には、三人でどこか旅に出るのも良いやもしれぬな。寿々の好きな所でも行くのも良い」

「ふふ……楽しみにしてますね」

私は寿々を抱きしめながら決意を固めた。この手で……鬼舞辻無惨を滅して見せると……。

其ノ肆 鬼ならざる鬼

「っ!? なんだ? 今の寒気は ?」

誰に発したでも無い声のごとも分からない部屋の中にこだまする。その声を発した人物、鬼舞辻無惨は何故か全身が凍ったかのような寒気を覚え、みじろんでいた。

「この感覚 大昔、あの“耳飾りの男”に出会った時と同じ どういうことなのだ? あの男は既にこの世にはいない はず」

だが実際にそのような寒気と強い殺気を肌で感じた無惨は困惑を隠せないでいた。自分の中で唯一、恐怖の対象としてみているのがその“耳飾りの男”なのだから、それに似たような殺気と寒気を覚えれば誰でも恐怖するものだ。

「あの時私は、あの“耳飾りの男”に追い詰められ体を分裂させることでなんとか逃げ

出すことができたが、それ以来奴とは会っていない。そして……奴の血縁であるもう一人のあの“首飾りの男”も既に私の配下によって時空の彼方へ飛ばしたはず……もはや私の対抗しうる存在などありはしないのだ……」

その後無惨は考える事をやめ、再び自分の目的、太陽の克服のために青い彼岸花を探すべく調査を続けるのだった。だが、無惨はこの時気づくべきだったのかもしれない。時空の彼方に飛ばしたその“首飾りの男”が今、自分と同じ時代に飛ばされてきているということに……。無惨がそのことに気づくのはまだ先の話だった。

「……………のどかであるな」

鬼との一件から少し経った。あれから私達は古くなつた平家を掃除し。床に穴が空いたところなどは近くに住んでいる者に材木などを譲つて貰い、継ぎはぎをした。嫌な顔をされると思っていたが、意外にも優しい者であつた為、快く譲つて貰えたのだ。後で何か礼をせねばな……。

今は特に何もする事がなく、家の縁側に腰を座らせ外を静かに眺めていた。寿々は可奈とともに床についている為、現状私は今一人である。こうして一人で過ごすというのは久々でもあり、少し物寂しさが出ていた。

「寿々よ、少々外に出てくる。夕刻までには戻る……」

寝ている為、聞こえているかは分からぬが寿々にそう伝えた私は家を出て、近くを歩いた。やはり何度見てもこの時代の物や建物には慣れなかつた。仕方がないことかもしれないぬな。未来であるならばこれだけの街並みになつても納得であるし、物の価値も変わっていることだろう。

「わかつてはいたが、本当にこの時代は……む？」

街並みを見つつ、感激を覚えていた私だったが背後から妙な気配を感じ刀に手を添えつつ、私はゆっくりと振り返った。

「・・・・・・・・何奴だ？」

「そのように言う貴方の方こそどちら様ですか？ どうにも貴方からは昔会った恩人の方と似たような雰囲気を感じられますが？」

そこにいたのは黒い着物を羽織ったなんとも儂げな女と顔が妙に青白く、同じように袴を着ているなぜかこちらを睨んでいる男だった。だが、一見人間のように見えるがこの者たちはおそらく・・・・・・・・。

「・・・・・・・・鬼か？」

「見抜かれるとは思っていましたが、まさかこんなにも早く勘付かれてしまうとは思いませんでした・・・・・・・・。はい、私たちは鬼です。ですが、私達は人を

無闇に食べたり傷つけたりしているわけではありません。私たちはある事を目的として行動をしているのです」

「ほう？……あることとは何だ？」

「貴様！不躰だぞ！誰とも分からぬような輩に珠世様の目的など教えるわけがないだろう！」

隣の男がいきりたつて私に言った。確かに不躰であつたな。せめて名乗っておこう。

「すまぬな。……私の名は継国昌継。しがない鬼狩りである」

「継……国？貴方はまさかあの恩人を、縁壺様を知っておられぬのですか？」

名を名乗つた途端、珠世と呼ばれた女は血相を変えて私に詰め寄ってきた。

「兄上を知っておるのか？」

「兄上．．．．．そうですか、あの時縁壹様が言っていた『私の下に私よりも強さも才もある弟がいる』と言うのは貴方様のことだったのですね．．．．．？ですが、待つてください。その貴方が何故ここに？貴方は本来、戦国の世にいる身のはず．．．．．何故？」

「信じられぬ話かも知れぬが私は．．．．．」

「時代から飛ばされたのだ．．．．．」

「．．．．．そのような事が。それで今は、あのば．．．．．鬼舞辻無惨を倒すべく鬼狩りを続けていると言う事で間違い無いですか？」

「そうだ。私がこの手で倒す．．．．．」

それから私は事情を説明し、珠世達に私の目的は無惨の討伐であると話した。どうやらこの二人はあるものを調査するためこの地に来ていたようだった。この女は珠世、隣の男は兪史郎と言うらしい。

「先ほど、昌継様は私たちの目的が何かと聞いてきましたね？」

「話す気が無いのであれば詮索するつもりはないが？」

「折角珠世様が話してくださると言うのに話を遮るな！」

「兪史郎・・・・・・・・。昌継様に無礼は許しませんよ？」

「はい！わかっております！（怒った珠世様もまた素敵だ！）」

・・・・・・・・話が進まぬな。早く本題に入って欲しいものなのだが・・・・・・・・。

「それで、私たちの目的と言うものですが、一つは昌継様と同じく、“鬼舞辻無惨を倒すための薬”を作ると言う事。二つ目は、鬼を人間に戻すと言う薬を作ると言う事。この二つの目的のため、私たちは行動をしているのです」

「この俺も元は人間で病のせいであらう余命いくばもなかったんだが、珠世様の医術によって鬼にしてもらったんだ。鬼であるなら病など関係なしに吹き飛ばせるからな。だからと言って無理やりならされたわけじゃ無いからな？俺は自分の意思で鬼になると決めたんだからな」

「その話は関係ない気もするが……まあ良い。鬼を人間に戻す薬が作れるのであれば、私も出来る限り其方たちに力を貸そう。それとだが、先ほど話した“鬼舞辻無惨を倒すための薬”は必要ない。私が直々に倒す故にな。だから其方たちは人間に戻す薬の方に尽力して貰いたいのだ。……構わぬか？」

「それほど心強いことはありません。ありがとうございます。では、鬼舞辻無惨と鬼に関しましては昌継様に任せます。その際なのですが、この血液採取計を使って鬼の血を採取して貰いたいです。その血を使って研究を重ねたいので」

なるほど。血を使って薬を作ると言うことはいい考えであるな。ならば私はそのためにたくさんの鬼から血を採るとしよう。

「承知した。では私はそろそろ行くが、最後に少し聞きたい事がある……」

「?何でしょう?」

「縁壺兄上を知っていると言うことは、其方は戦国の世から存在している鬼ということになる。だが、それから今の世まで、鬼舞辻無惨の監視下を逃れ続けるということは容易いことではない。……いったい何をしたのだ?」

「何もしていませんよ?ただ、あの大ば……鬼舞辻無惨に対する憎しみが、何故かその時に強くなつていって、次第に無惨の支配から逃れられるようになっていったんです。おそらくですが、その時から……」

「そうか、つまらぬ事を聞いたな。では、さらばだ」

その場で二人と別れた私は家に戻った。さて……これから少し忙しくなくなるが、これもこの美しい世を守るため。そのためならば私は迷わず修羅と化そう……。

其ノ伍 受け継がれた血

今私はとある山に來ている。無論鬼を狩るためにだ。寿々には少し留守にするとだ
け伝えここまで來ていた。そして、今日の前にいるのは、既に私に斬り刻まれ息絶えそ
うな鬼だった。

「・・・・・・・・」

「き、貴様は一体何者なんだ!?」十二鬼月”であるこの俺が、こうも・・・・・・・・」

「知らぬ。お前がどんな鬼であれ関係は無かろう・・・・・・・・」

「お、おのれ〜!!!血鬼術ーー」

「光の呼吸・・・・・・・・・・【輝月蓮華】」

「なっ?!?・・・・・・・・そんなばか・・・・・・・・な・・・・・・・・」

私の斬撃は、目の前の鬼の頸を最も簡単に斬り裂いた。例によつて件の鬼は頸が地面に落ちると同時に静かに塵となつて消えていった。

「何やらほざいておつたが、大したことは無かつたのであるな。〃 十二月〃・・・・・・・・であつたか?それが何かは知らぬが、私にとつてそれはどうでも良い。どんな鬼も私が全て滅ぼす・・・・・・・・それだけである」

この鬼とは偶然出会つただけなのであるが、どうにもこの鬼は近くの民家・・・・・・・・鬼が言うにはまだ幼い〃 双子の兄弟〃 が住んでいる民家に押し寄せようとしてた様だつた。それを聞くと同時に私は何も言わずに刀を抜いていた・・・・・・・・。また罪もない者・・・・・・・・ましてや子供を食らい尽くそうとしているこの鬼を滅すために・・・・・・・・。

結局何事もなく鬼を滅した私は、完全に死体が無くなる前に血を採取し、その場を去

ろう……としたのだがその時不意に誰かに呼び止められた。声をした方へ視線を向けてみると、そこに居たのは歳十……に行くか行かないかと言うほどの子供が立っていた。

「あの……お兄さん誰？」

「ただの鬼狩りである。其方は、この先の住人の者か？」

「はい。時透無一郎って言います。……え？お兄さんの後ろのつてもしかして……？」

無一郎といった少年は、視線を私から後ろの鬼に変えると、少し怯えた表情をした。

「無論鬼だが、心配はせずとも良い。既に息はない」

「……そうですか。よかった」

安堵の表情を見せる無一郎。その表情を見て私も改めてこの少年を守れてよかったと思えた。もし、私に来るのがもう少し遅かったらと思うと……考えたくも無かった。

「この辺りの鬼は全て片付けてある故、問題はないが少ししたら住む場所を移す事を勧める。いつまた鬼が出てくるかわかったものではないからな（……それにして）もこの少年はどことなく巖勝兄上の様な血液の流れ、身体つき、呼吸、そして顔をしているな」

私が少年を見たときにまず始めに思った事がそれだった。全く同じと言うわけでは無いが、確かに巖勝兄上の面影がある。だが、少年は“時透”と言った。ここは三百年以上……いや正確には四百年以上だと珠世が教えてくれたが、それ程先の未来であるが、どうやら継国の名は潰えてしまった様だな……。だが、それでも僅かだが巖勝兄上の血が混ざっているのだろう、この少年もまた兄上の様に刀を持てば凄まじい剣客となる事を私は確信した。

「何から何まですいません……。あの、良ければ家に来ませんか？お礼の意味も込

めて何かさせて下さい！」

「そうか……では、水を貰えぬか？少々喉が乾いていてな」

「わかりました！では行きましょう！」

笑った無一郎は私の手を引き、家に案内した。少し歩けばその家が姿を現した。特段大きな家では無いが兄弟二人で過ごすには申し分ない家だった。

「兄さん、帰ったよ！」

「……遅かったな。どこに行ってたんだよ？」

「ちよつと外まで出てただけだよ。それでさ、お客さんが来てるんだ！」

「は？誰だよ？」

「どうぞ、入ってください」

「うむ……」

私は無一郎に促され、家の中に入った。中にいたのは無一郎と瓜二つの少年がいた。どうやら無一郎とこの少年は双子の様だ。この少年にも同じ様に巖勝兄上の血が紛れていることもあるため、間違い無いだろう。

「邪魔をしてすまぬな。先ほどの家を狙う鬼と遭遇したものでな、早急に滅したところ偶然通りかかったこの無一郎にお礼として招かれたのだが……迷惑だったか？」

「鬼がつ!?!……そうか。貴方には俺たちの命を救われた様だ。迷惑などありません、丁重にもてなします。俺は時透一郎で、そこにいる無一郎の兄です」

「感謝する。私は継国昌継、しがな鬼狩りである」

居間に腰を下ろした私は二人の様子を観察していた。見ているとわかったがどうにも二人……特に無一郎の方がぎこちなかった。何やら仲に問題がありそうだ……どこか剣呑な雰囲気の中、私に水が差し出された。

「どうぞで」

「すまぬ。ところで一つ聞きたい。有一郎よ……」

「はい？何でしょう？」

「……何故お前は無一郎に辛く接している？」

「っ!？」

そう聞くと同時に有一郎は肩を震わせた。よほど聞かれたく無かったことなのか、俯いたまま言い澀んでしまっていた。無一郎もまた、兄の答えを待っていた。

「……………貴方には関係のない話です」

「確かにそうであるが、このままではずっと無一郎と仲違いをしたままであるぞ？ お前はそれを望んでいるわけでは無かろう？」

「それは……………」

「どうやら私のいつてることは真の様だ。いまだに齒切れの悪い有一郎が、視線を私にはなく隣に座っている無一郎に変えたことから私は何かを悟った。」

「……………お前は弟思いであるな」

「っ!?!何を……………」

「誤魔化さずとも良い。お前は親の代わりにたった一人の家族である無一郎を守ると言う事を心に決めているのであろう？」

「え？」

「!!？」

二人して驚きを隠しきれずにいた様子だったが気にせず私は続けた。

「だがいつも余裕がないせいとか、心にもない事を無一郎に対して言ってしまう事をいつも悔やんでいるのではないか？どうして優しくできない？どうして一緒に笑い合えない……と」

「……………」

「兄さん……………」

「余裕がないのもわかるが、それでは互いの溝が深まるばかりであるぞ？過去に何があつたかは知らぬが、その過去を一人で背負う必要はないのではないか？無一郎もそれを望んでいないはずだ。……………そうであるか？無一郎？」

「はい……兄さん何で言ってくれなかったの？僕だって兄さんと一緒に——」
「お前に何ができるってんだっ!!一人じゃ何もできないお前につ!!」

部屋内に有一郎の怒声が響き渡った。

「一緒に背負う？それが出来ないから俺が背負ってるんだろうが！それに前お前言ってたな？あの白髪の女から言われた事を間に受けて剣士になって人を救うってな……寝言言ってるんだよ！人を守れる奴なんて選ばれた人間にしか出来ないんだよ！先祖が何だっつてんだ!?!いくら先祖が凄くったって、子孫の俺たちに何ができる！刀を握ったところですか！鬼に喰われておしまいだ！わかったなら——」

「それは違うぞ有一郎……」

「!?!」

話を遮られたことに憤りを覚えたのか、怒りの表情のままこちらを睨んできた有一郎に私は優しく語りかけた。

「お前達二人には凄まじい程の才を持っている。私には分かる。お前達は人を守るに値する選ばれた人間であると言うことは、その血が証明している．．．．．試しにこの刀を振るってみるが良い」

「．．．．．」

訝しげな表情をした有一郎だったが、洩々私の刀を持った。すると．．．．．。

「(!?何だこの感じ？手に馴染むって言うか．．．．．なんか変な感じだ)」

持つと同時に、まるで体と手が覚えているとでも言わんばかりに流れる様にして刀を振っていた。有一郎は何が起こってるのか分からず困惑していた。

「どうだ？」

「刀を持った途端、体が勝手に動いた……違和感もなしに……」

「先祖の血がそうさせるのやもしれぬな。せつかくだ、無一郎も振るってみるが良い」

「はい」

無一郎も同じ様に刀を持ったが、やはり同じで流暢な刀さばきをしていた。やはり、この兄弟は巖勝兄上の血を受け継ぎ、才も私や縁壺兄上以上のものを持つておるな……嬉しい限りである。

「これで分かったか？お前達は決して選ばれなかった人間などでは無い。人間を守る権利を持った選ばれた者だ。……よく聞くと良い二人とも。お前達は今後、人を守るため、人を導くため、そして……人に優しくするために刀を振るのだ。今も昔もこの美しい世を乱す悪鬼どもが生息しておる。その様な世では一向に平穩は訪れぬ。だからこそお前達の様な選ばれた者達が人々の灯火となるべく鬼を狩るのだ。鬼を狩れば、いずれはお前達二人も何にも恐れることなく二人で平和に暮らせるだろ

う……………だからこそ、今は鬼を狩るために尽力するべきだ……………」

「……………」

私の言葉を一音一句聞き逃さないと言った表情のまま二人は静かに聞いていた。後、私から言えるのはこれだけであるな。

「私も鬼を狩り、人を守る。無論お前達のことだ。ここまで私が焚きつけたのだ、死なすわけにはいかぬ故にな。お前達のような子供に鬼狩りをさせるのは酷であるが……………もし嫌であるならば断つても良いぞ？」

「僕はやりませす！選ばれた人間であるなら、僕は人々のために戦いたい！」

「そうか……………俺は選ばれた人間だったか。今まで俺は、何も守れないと思ってた……………誰も救えないと思つてた……………無一郎でさえも……………だ、刀を持てば、誰も悲しませることはない。誰も苦しませることはない。無一郎のことも守つてやれる！……………なら！」

何かを決意した有一郎は目をギラギラさせながら言った。

「俺も、無一郎と人々を守るために、鬼と戦います！そして平和を掴み取って見せます！」

「うむ。よくぞ言った。ともにこの世に住う悪鬼どもを駆逐しようぞ」

「はい!!」

その後、私は軽く刀の振り方、呼吸法を教え、その家を後にした。いつか共に肩を並べて鬼を滅そうと言う約束をして……。

「何だか凄い人だったな．．．．．」

「うん．．．．．僕たちもいつかはあんな風になれるのかな？」

「きつとなれるさ。俺たちなら．．．．．そうだ、今まですまなかつたな無一郎．．．．．」

「うん、気にしてないよ。これからは一緒に頑張つて行こうね！兄さん！」

「ああ、お前とならどこまでもやっていけそうだ！何たつてお前の無一郎の“無”は．．．．．」

其ノ陸 派生の呼吸

「水の呼吸・式の型【水車】”！”」

「む？あれは……………」

この時代で鬼狩りを始めて一年近くが経とうとしていた。いつもの様に私は鬼を狩るべく近くの山に入ったのだが、その時若い男の声が聞こえてきた。声のした方へ向かってみると、そこには、二人の少年が立ち合いをしている姿があった。先ほどの声はどうやら穴色の髪をした少年からだった様だ。

「負けるか……………」水の呼吸・肆の型【打ち潮】”！！”

「まだまだだっ！”水の呼吸・壺の型【水面斬り】”！！”

「ほう．．．．．？」

中々に筋がある少年たちの様だ。筋の良さでは穴色の髪の少年の方が上の様にも見えるが、黒髪の少年もまた劣ることのないほどの腕を持っている。中々に面白い．．．．．。

「（あれは“水の呼吸”か？確か縁壺兄上が自分の呼吸を違う形で教えた時に出来た呼吸だと聞いていたが、どうやら四百年以上たつた今でも呼吸は継承されてきている様である．．．．．）」

縁壺兄上は自分の“日の呼吸”を継承させるのは難しいと考えたのか、それを少し変え、その人物に適応した呼吸の仕方をさせることで派生の呼吸を後の者達に体得させたのだ。確かそれは．．．．．炎・水・雷・岩・風の五つだったはず。私もその様に呼吸を教えるべきだとは思っていたのだが、生憎それをする前にこの時代に飛ばされてきてしまったのだ。．．．．．なんとも嘆かわしい．．．．．。

「はあ．．．．．はあ．．．．．!?なに奴だ!」

「!!．．．．．人?」

「む?．．．．．すまぬな。邪魔をしてしまったか?」

考え事をしているうちに、どうやら二人が私のことに気づいた様だ。二人とも抜き打ちの姿勢のまま私を警戒していた。

「貴様は何者だ?」

「．．．．．通りすがりの鬼狩りと言っておこう。ふつ．．．．．そう警戒せずとも良い。私は其方たちを斬る気など毛頭ない。ただ、其方たちの剣技に惹かれ、つい見入ってしまったただけなのだ」

「．．．．．」

私の言葉に納得したのか、二人は警戒を解き刀をしまった。

「かたじけない。．．．．．して、其方たちは何故ここで刀を振っているのだ？」

「まじかに迫った最終選別に向けての特訓です。鬼に遅れを取るわけにはいきませんか。だから今ここで義勇と共に己を鍛えていたところなんですよ」

「最終選別．．．．．そうか。其方たちもまた鬼を滅ぼす為、鬼殺隊に入ろうと言うのか．．．．．」

「．．．．．？どうかしたか？」

無一郎や有一郎の時にも思ったことだが、やはりこの様な少年たちに刀を握らせるのは不快である．．．．．。本当であれば、この様なことはせずに自分のやりたい事をやっている年頃なのである。．．．．．鬼がいる限り、それは叶わぬ夢かもしれん．．．．．よし。

「すまない。少々考え事をな．．．．．。して二人とも、其方たちは今の実力でも充分最終選別を突破できるだけの力は持っている」

「?．．．．．?」

「．．．．．」

「だが、念には念をと云う言葉もある。最終選別の時に思わぬ敵と出会った時も想定し、其方達には私の“技の一つ”を伝授してやろう」

「技の一つ?」

私が自分の呼吸を教えるなど初めての経験だが、それでもこの少年たちの将来のため、私も精一杯やらせてもらおう。

「まず、手本を見せる。二人とも容赦はいらぬ。かかってくるが良い……」

「はあ……？よくわかりませんが、わかりました！行くぞ義勇！」

「ああ！錆兎！」

二人は刀を抜くと、素早い足の運びで私に迫ってきた。ちょうど私と二人の距離が一人分ほどの距離になり、二人が刀を振り下ろしてきたところで私は技を使った。

「……………」
“光の呼吸” 【光天の舞】

「えっ!?!消えたっ！ど、どこにつ……………」

「・・・・・・・・後ろである」

「っ?!?いつの間に!?!」

二人の刀が私に届きそうになった刹那、私は目を閉じ心を落ち着けた後、一瞬で二人の背後へと回り込んだ。二人は私の姿が捉えられなかった様で啞然としていた。

「どうした?もつとくるが良い・・・・・・・・」

「くっ!はあっ!!」

「っ!!」

振り向きざまに再び二人は攻撃を仕掛けてきたが、私は流暢な流れる様な足運びで軽快にその剣撃を躲していき、二人を翻弄していた。

「くそっ！何で当たらない！何でっ……………」

「受け止めさせも出来やしないのか……………」

「……………受け止めて見せよう。来い」

この技は相手の攻撃を躲すことだけに特化したいわば防御の技である。軽快な足の運びと、心を無にしたことによる相手の読みを遮断する技術、そしてもう一つ……………

「せやあっ!!!」

「ふっ!!」

「……………」

私は、迫りくる二人の刀を峰の部分で軽く受け止めた。……………そして。

「なっ!?」

「勝負あり……であるな」

二人の刀をそのまま横へと受け流し、勢い余った二人はそのまま私の横をすり抜けるかの様にして倒れ込んだ。そしてゆっくりと二人の喉元に刀を突きつけた。

「……参りました」

「ふむ。これでわかったか?この技が出来れば大抵の攻撃は凌ぐことが出来る。其方たちにはこの技【光天の舞】を伝授したいのだが……この技を習得するのにはかなりの苦勞が待っている……それでも伝授して欲しいと言うのであればそうしよう……いかようにする?」

「……」

二人は顔を見合わせ、頷き合った。そして改めて私の方を向いた。……そし

て二人は言った。

「どうか！俺たちにその技を伝授してください！」

「ふっ……よからう。私も全力を持って伝授しよう……」

それから私は、二人に技を伝授する為、毎日そこに通う様になった。最終選別までここまで長くはなかったが、できる限り完成形に近い形をふたりには習得してもらいたく、私は必死になって伝授をした。この「光天の舞」を習得する上で最も重要なことは、心を無にできるかどうかである。これが出来なければこの技の習得は望めない。それが一番難しいことなのであって、二人もやはりかなりの苦戦を強いられていた。だが、それでも二人の少年、鍔兎と義勇はめげずに何度も何度も繰り返し励んだ。その姿に私も心を打たれたのだった……。

……結局最終選別当日まで完璧な形の「光天の舞」は伝授することはできなかったが、ある程度の鬼であれば今の二人が使える「光天の舞（劣）」でも充分対応でき

るだろうと私は合格を出した。

・・・今、二人の最終選別が始まろうとしていた。

其ノ漆 修行の成果

「……お主か？二人に剣を教えていたと言われる者は？」

錆兎と義勇が最終選別に向かったのを見送ると同時に、近くの小屋から天狗の仮面を被った男が出てきた。見たところ、かなり出来る者の様だ。

「すまぬな。勝手に其方の弟子に指導をしてしまった……」

「それは構わぬ。それであの子たちも強くなってくれるのであればなにと言わぬ。……紹介が遅れたな。わしは鱗滝左近次という者だ。……お主は？」

「……継国昌継と言う。未来ある者達のため、鬼を狩る者だ……」

「継国……!?日の呼吸の開祖の……」

この者はどうやら縁壹兄上のごことは知っている様だ。ならば、話しても問題はなさそうであるな。

「うむ。其方の知っている継国縁壹は、私の兄であるのだ……」

「兄?……どうということなのだ?継国家はずいぶん前に潰えたはず……だというに、何故お主がこの様なところにいる?」

私は簡単に事情を説明した。時代を飛ばされたなど、簡単に納得してくれるはずもなく、始めは疑い深く見ていた左近次であったが、最後には納得してくれた。

「なるほどな。つまり今はお主の時代に帰る方法を探っているのと同時に、この時代の鬼どもを駆逐している……」

「そういうことである。それでなのだが、私が教えた技というのは……」

そこから少し、私は左近次と話をした。私がふたりに教えた【光天の舞】について、私の呼吸について、私の時代の鬼どもの話など、話題が尽きなかった。ここまでは人と語り合ったのは縁壺兄上以来であるな……。

「ふっ……なるほどのう。それならば、あの二人は問題なく最終選別を突破するであろう。仮に……異形の鬼と出会ったとしても、あのふたりならばきつと無事に帰ってくる。わしはそう信じておる。なにせ、開祖の弟君の技を伝授して貰ったのだからな……。」

「……そうであるな。錆兎と義勇とはまた改めて語り合いたいものだ。だからこそであるが……錆兎、義勇よ……。」

「無事に帰ってこい………」

「？今、昌継さんの声が聞こえた気が………」

「かもしれないな。あの人も鱗滝さんも俺たちも無事を祈っていてくれているんだろう。ならば、男ならばそれに応えなくては恥だろう。義勇！一気に鬼どもを駆逐するぞ！」

「ああー！」

最終選別で藤襲山に入った鍔兎と義勇は、他の仲間立ちには目もくれず、目の前に現れた鬼どもを片っ端から仕留めていった。その鬼を狩る速度は今までに類を見ない程の速さであった為、初日が終わる頃には山にいるほとんどの鬼を片付けてしまっていた。……実は、昌継には「光天の舞」の他にも剣技などを学んでいて、さすがに“光の呼吸”が出来る訳では無かったが、出来る範囲で水の呼吸の強化、刀の使い方、受け身の取り方、“全集中”【常中】、その他諸々を教授してくれた事もあって、そこらの人を一人二人喰った鬼では相手にもならないほどの実力に二人はなっていた。

「……………弱いな」

「昌継さんと比べれば……………それはな……………」

二人はちよくちよくであるが、昌継と立ち合いをしていたが、今のここまで一太刀も浴びせる事は出来なかった。昌継の攻撃を躲そうとすれば、先を読まれ面を打たれる。

かと言って受け止めても力づくで押し切られ、結局面を打たれる。こちらから攻撃を仕掛ければ簡単に躲かれ、動きが読めない為読み合いも通用しなかった。・・・・現状として二人が昌継に一太刀入れる事は不可能だと考えている。

「あんな凄いい人にご教授してもらえたんだ。ここで落ちては面目が立たん。さつさと決着をつけよう！」

「・・・・・・そうだな」

二人は再び、残り少ない鬼を狩りに動こうと地面を蹴ろうとした・・・・・・その時だった。

「ふふふふつ・・・・・・来たなあ、俺の可愛い狐があゝ・・・・・・」

「つ・・・・・・」

慌てて二人は臨戦態勢に入った。そこにいたのは明らかに今まで戦ってきた鬼とは

違う雰囲気纏った鬼だった。大きな巨体を持ち、何本もの腕を持った何とも気味が悪い鬼だと二人は戦慄した。

「十……十一……お前達で”十二”と”十三”だ」

「……なにを言っている？」

「俺が今まで喰ってきた鱗滝の弟子どもの数だよ。あいつの弟子はみんな殺すつて決めてるからなく！」

「っ!! 貴様!!」

それを聞いた義勇が珍しく怒りに震え、その鬼に向かって斬りかかろうとした。

「落ちつけ義勇。鱗滝さんと昌継さんに言われた事を忘れたのか？」

「!? ……すまない。熱くなった……」

鑄兎に促され、冷静になった義勇は再び鑄兎の隣に戻り、警戒を強めた。

『鑄兎、義勇。お前達は良い腕を持っているがまだまだ青い。一時の気の乱れが命とりとなる事を心がけよ！』

『其方達は常に心を冷静にする事を心がけるのだ。そうすれば自ずと活路は見えてくる……』

これが二人に言われた言葉だった。昌継と左近次に共通しているのは、“どんな時にも熱くならず冷静でいること”だ。どんなに優れた剣士であっても気が乱れてしまつてはその腕を鈍らせる。それがわかっている二人だからこそ言える言葉だ。

「こいつは今までの鬼とは違う……。気を引き締めていくぞ、義勇！」

「ああ、錆兎！」

二人は、颯爽と鬼に向かって行つた。直後、何かを感じ取つた二人は、急遽横に飛んだ。そして、すぐに……

「ちい……外したか……」

「やはり地面から来たな……もう少し遅ければ不味かつたな……ふっ！！」

錆兎は躲したと同時に体の向きを変え、“地面から出てきた手”を斬り刻んだ。

「今だ！行けっ！義勇！！」

「はっ!!」

錆兎が切り開いた道を義勇が進んでいく。そして射程圏内に入ろうとした時だった。……目の前の鬼から新たなる複数の手が現れた。

「水の呼吸……!!?」

「ふふふつっ、俺の手は今あるのだけで全部じゃないんだな。これが。お前達は今まで戦ってきた狐の子の中で一番強かったが……ここまです、死ぬ!」

新たに現れた手が二人に襲いかかる。目の前の鬼は勝つたと勝利を確信した笑顔をしたが、それはすぐに崩れ去った。

「光の呼吸【光天の舞(劣)】!!」

「なっ!?! 躲した!?! それに俺の攻撃を受け流しただど!?! お前達のような餓鬼にそんな力が……」

驚愕の表情へと変貌を遂げた鬼が嘆いた。義勇は迫りくる鬼の手をまるで先が読んでいるかの様に軽々と躲していき、鬼との距離を詰めていった。鎗鬼は同じ様に相手の手の動きを読み、手が自身の体に接触するところと自分で自身の刀を使って防ぎ、そのまま後ろへと受け流して行き、同じ様に距離を詰めて行った。

「死ぬのは……貴様だ!!」

距離をつめ、間合いに入った二人は高々と跳躍し、鬼の頸目掛けて一直線に突っ込んでいく。

「大丈夫だ！俺の頸は硬い。今まで誰にも斬れ無かった頸なんだ。頸を斬ろうとして刀が折れた時が、お前達の最期の時だ！」

「水の呼吸」・壺の型……」

「水の呼吸」・肆の型……」

二人は鬼の思惑も知らずに、関係無しに刀を振った……そして。

「【水面斬り】!!」

「【打ち潮】!!」

二人が放ったその斬撃は、目の前の鬼の頸に炸裂した……。そして鬼の頸は……
ゆっくりと地面へと落ちていった……。

「義勇!」

「錆兎……」

鬼が消滅したのを確認した二人は、笑顔で拳を合わせるのだった……。

其ノ捌 思わぬ邂逅

——錆兎と義勇が最終選別を突破した——

その事実に関心ホッと息を吐く私は、今日の前にいる錆兎と義勇に視線を向けた。

「二人とも、よくぞ無事に戻ってきてくれた。お前達ならば心配はいらんとは思っておったが、今までのことを考えると……心配だな……」

そのことについては私も左近次から聞いていた。聞くかどうかやら今まで左近次は数多くの弟子達を指導していたようで、胸を張らせながら最終選別へと送り出していったらしいのだが、その弟子達は誰一人として最終選別から帰っては来なかつたらしい。その事もあって、初めて自分の弟子が自分のもとに戻ってきたことに感極まったのか、左近

次の瞳から涙が溢れでていた。

「それは鱗滝さんの指導あつてこそですよ。貴方の厳しい指導が無ければきつと……俺たちはあの鬼に殺されていたでしょう。ですが、今俺はこの場にいます！それは紛れもない事実です！なので……笑ってくださいよ、鱗滝さん。一緒にこの喜びを噛み締めましょう！」

「錆兎の言う通りです。今の俺たちがあるのは鱗滝さん、貴方のおかげです。これから鬼殺隊としての任務がある為、ここでの修行は望めませんが、それでも！貴方はこれからもずっと俺たちの師範です。……ありがとうございます」

「錆兎……義勇……」

左近次はゆつくりと二人の元へと行き、静かに抱きしめた。その光景はまるで親が子供の帰りを迎えるかのようだった……。

「それで昌継さん。貴方にもお礼を言わなくては……」

「礼には及ばん。私の身勝手故に二人に教授したまでだ。気にするでない」

「そんなこと言わないでください。鱗滝さんはもちろんのこと、今回の最終選別を突破できたのは昌継さんのおかげでもあるのですから」

「ふっ……そうか」

異論は認めない。と言った口調で話す二人に私は素直に応じた。

「貴方に伝授された【光天の舞（劣）】……あれが無ければ少なくとも一人は殺さ

れていたことでしょう。それだけあの鬼は強かったです。ですが、その鬼さえも破って最終選別を突破した俺たちならどんな鬼とも立ち向かっていける！そんな気がしてならないのです！」

「凄い自信だな．．．．．錆兎は」

「うむ。その自信はいずれ己に更なる力をもたらすことであろう。だが、だからと言って力に溺れ慢心する事は決してはならぬぞ？一時の気の油断でも命取りになる場合もあるのだからな．．．．．そのことをゆめ忘れるな」

「うっ．．．．．は、はい．．．．．」

それを忘れなければ、きつとこの少年達は私をも凌ぐ剣士となれる。そう確信した私は、静かにその場を去ろうとした。

「．．．．．行くのですか？」

ふと義勇がそう呼び止める。

「うむ。私は鬼殺隊では無いが、鬼狩りであることに変わりはない。こんなところでじっとしているわけには行かぬのだ。……錆兎、義勇よ……」

「はいっ」

私は二人の返事を聞くと同時にゆっくりと微笑んだ。……そして……。

「縁があれば、また会おう……」

そう言い残し、私は今度こそその場を後にした。若き剣士、錆兎、義勇の健闘と無事を祈って……。

「・・・・・・・・」

静かなる夜の中、無惨はどこか訝しげな表情をして青い彼岸花の調査を続けていた。無惨がその表情になるような出来事が最近頻繁に起こっているが為である。

「なぜこうも簡単に下弦の者どもは倒される？・・・・・・・・しかも、倒された相手は同じ者だと言うでは無いか・・・・・・・・ちいっ!!」

思わず持っていた本を握り潰してしまった無惨。そう、ここ最近起こっていること・・・・・・・・それは下弦の鬼・・・・・・・・つまり鬼の中でも高い能力を持った精鋭達、“十二鬼月”が次々と“名のしれぬ鬼狩り”に仕留められていることだった。その数は、既に“三”にまで上っていた。

「全く何と言う愚かさだ……これが鬼最強と曰う十二鬼月か？……そうは思わぬか？……黒死牟？」

「……はっ」

いつの間にか、後ろに控えていた黒死牟と呼ばれた鬼は平伏する。鬼だと言うのに見た目はどう見ても人間にしか見えない背格好をしており、鬼でありながら剣技と呼吸を使えると言う、何とも異質な鬼である。顔には目が何と“六つ”もあり、そのうち二つに“上弦の壺”と刻まれていた。

「私の言いたいことが分かるか？黒死牟？」

「出る杭は早めに打て……そう仰りたいと？」

「その通りだ。さつさとあの忌々しい鬼狩りを始末して来い。してきた暁には私の血をふんだんに分けてやろう……」

「・・・・・・・・御意に」

音も無くその場を去った黒死牟はすぐさま件の鬼狩りの元に向かった。だが、この時黒死牟は知らなかった・・・・・・・・。自分にこの後起こるとても悲惨で絶望的な出来事が迫ってきていることに・・・・・・・・。

「・・・・・・・・いつ見ても、この世の月は美しい」

ある海辺で私は月を眺めていた。あれから私は幾多もの鬼を狩り続けてきた。とは言いつつも家を留守にしているわけでは無く、一通り鬼狩りが終われば家には戻ってい

る。なにぶん心配性な私であつてあまり寿々と可奈とは離れていたくは無かつたのだ。……話がずれたが、今日も私は鬼を狩つた。つい最近ではまた“十二鬼月”を名乗る鬼が私の前に現れたが、その鬼も私がすぐさま滅した。未だにその“十二鬼月”の意味がよく分からぬが、鬼であることに変わりはない。私の目の前に立ちほだかるならば斬り捨てるのみである。

「さて、そろそろ……つ？」

「貴様があの方の仰つていた鬼狩り……か!？」

「この気配……やはり鬼である……か？」

後ろに鬼の気配を感じた私は、鞆に手を掛けつつゆつくりと振り返つた。振り返つた先にいたのはどこか私の時代にいたような格好をした鬼がいた。だが……私はその姿を見た途端、息が止まつたかのようにしてその場に佇んでいた。……それはどうやら向こうも同じのようであつた。私たちがこのような状態になつた原因……それは……。

「ま、昌・・・・・・・・・・継・・・・・・・・・・？」

「巖勝兄上・・・・・・・・・・」

その相手が自分の知っている・・・・・・・・・・いや、むしろ知り過ぎてしまっている“兄弟”だったからだ。かくして私と巖勝兄上は四百年以上の年月を経て、最悪の形で再会を果たしたのだった・・・・・・・・・・。

其ノ玖 光と月

私には忌むべき者が二人いた。一人は私の双子の弟、縁壺。類稀見ぬ剣技を持ち、私など遠く及ばぬ特別な存在だった。私が今使っている呼吸【月の呼吸】も縁壺の【日の呼吸】の派生でしかなかった……。

そしてもう一人。それは私のもう一人の弟、昌継。私たちよりも歳は一つ下だが、その才は縁壺と同等、もしくは凌ぐほどのものを持つていた。もちろん私をもゆうに凌ぐ。昌継は縁壺とともに呼吸を極め【光の呼吸】を会得したと聞いたが、実際にその剣技を見たことは無かった。だが私の勘ではおそらく縁壺同様、これまでに類を見ないほどの呼吸であると判断した。だからこそ思う。……昌継もまた、神に選ばれし特別な存在なのだろうと……。

この事実には私は今の今日まで、骨が灼き尽くされるような嫉妬と怨毒のような感情を

抱きつつ生きてきた。……鬼になつてまでして剣を鍛えるほどにだ。私には二人のような天性的な才がないと悟つた時、ならばそれを補うだけの努力をすれば良い。だがそれをするだけの時間が無かつた。額にできた痣がそれを証明しているように、これが発現したものは齡二十五になる前に死ぬらしい。だから私はこのまま何もできずに死ぬのだろうと……そう思つていた。

だがそんな折、あの方に出会つた。あの方は私の想いを組んでくださり、鬼になさつてくれた。これにより、私は長い時を生きることが可能となり、剣の鍛錬に励むことができた。そんな時を過ごして六十年……私は、縁壺と再会を果たした。若い頃の面影はすでに無く、シワがただれ、あの猛々しくそれゆえの威圧感などは鳴りを潜めていた。何より、なぜ縁壺が生きてるのかが気がかりだつた。痣者は二十五には死ぬはず……だが実際に目の前に奴はいる。やはりお前は特別なのだと……虚無感を抱いた。

私が鬼である以上、縁壺と戦うことは避けられず戦つたのだが、老いが進んで剣技が鈍つていると思われた縁壺の剣技は鈍るところか若かりし時と全く変わらない物を見せた。私の今までの努力を無に返すほどの……。やられる！そう思つた時、目

の前の縁壺に異変を感じた。よく見ると、縁壺は立ったまま身動き一つせず顔を伏せていた。……どうやら縁壺はこの場で寿命を迎えたようだった。そしてこの時、私に一つの思いがこみ上げてきたのだ。

「鬼狩りの歴史上最も優れた剣士が死んだ以上……私は誰にも負けぬわけにはいかない！どんなことがあろうとも！」

その時、私は決意を固めたのだ。決して誰にも負けぬと……。だが、今私の目の前にその決意を阻もうとする者……。私のもう一人の弟……。昌継が現れたのだ。……。それも、若かりしときの姿のまま……。。

「巖勝兄上・・・・・・・・その姿は・・・・・・・・」

「昌継・・・・・・・・何故この時代に・・・・・・・・？お前ならばとうの昔に死んでいるはず・・・・・・・・」

私と兄上の方に剣呑な空気が流れた。いつ刀を抜いてもおかしくない状況だった。

「私はある鬼によって時代を飛ばされたのです。それ故、私は元の時代に戻る手段を探す手間、この時代の鬼どもを滅しているところでもあります・・・・・・・・」

「時代を・・・・・・・・。まさか四百年の時を超えて、お前とこうして会うとは思いませんかったがな・・・・・・・・」

「兄上・・・・・・・・何故鬼になられた？気高い兄上がそのような醜い姿になるなど・・・・・・・・耐えられませぬ」

「お前に何がわかる？神に選ばれし特別な存在である“お前達”に？何も用いていな

かった私は鬼になることで強さを手に入れたのだ。もはやお前なども手につけられぬほどのな……私を舐めぬほうが良いぞ？」

兄上……何をおっしゃられている？ 私には理解し難いことだった。なぜなら……。

「兄上、私はそこまでたいそうな存在ではありません。あくまで歴史に身を流す一欠片に過ぎませぬ。私より剣技や才に溢れたものなど、この時代にも多く……」

「縁壺も同じことを言っていたが、はつきりと言おう。お前や縁壺を凌ぐほどのものは現れていない。四百年間鬼狩りどもを消してきたが、どれも大した腕では無かった……これでもまだ現れるというのか？」

「まだ分からぬではありませんか。いつどんな時にそのようなものが現れるか分からぬ。ですが、それもまた面白いではありませんか。そのものが如何様にして芽を出すのか。いかようにして私たちのもとまでたどり着くのか見届けたいとは思いませんか？ だが、鬼が存在している以上、それを見ることは難しくなっていることも事実。……」

ですので兄上……………」

そう言い、私はすつと刀を抜いた。

「貴方が鬼である以上、私は貴方に刃を向けることとなります。……………不本意ではありませんが、ご覚悟を……………」

「私を舐めるな……………言ったはずだ！」

兄上もそう叫び、私に刀を向けた。そして先に仕掛けたのは兄上だった。

「月の呼吸・捌の型【月龍輪尾】！」

兄上の横なぎの一閃が私に襲い掛かる。素早い攻撃速度、太刀筋、気迫……………確かにこれを見れば兄上がどれだけの修練を積んだかはわかった。だがそれでも……………。

「光の呼吸【輝月蓮華】」

私が放った光の斬撃は兄上の斬撃を最も簡単に打ち消した。

「ちっ・・・・・・・・月の呼吸・式の型【珠華ノ弄月】！」

「光の呼吸【照魂刺突】」

「なっ！ぐっ・・・・・・・・」

月輪の斬撃が私に襲いかかってきたが、それらに捕まる前に私は凄まじい突きを兄上に見舞った。私の突きは兄上の斬撃を掻い潜り、兄上の右肩あたりを貫いた。

「兄上・・・・・・・・努力は認めますが・・・・・・・・鬼になった兄上の剣など、私には届きませぬ・・・・・・・・」

「くっ・・・・・・・・おのれ！！月の呼吸・玖の型【降り月・連面】！！」

「光の呼吸【光天の舞】」

無数の斬撃が私に降り注いできたが、私の【光天の舞】はそれらを全て無に返すかの如く受け流し、合間ごとに兄上に斬撃を浴びせて行つた。

「わかつてください兄上。貴方は私が憧れた数少ない御人なのです……。ですから、せめて私の手で眠らせて差し上げましょう……。」

「くっ……。（なぜだ!?なぜ勝てない!私はこの四百年間、今までにないほどの修練を重ねた!もはや誰にも負けぬと自負ができるほどに!だが、この目の前の怪物にはそれさえも無意味だということか!……なぜなんだ。やはり私ではお前達には勝てぬのか?）」

もはやボロボロの兄上。ご安心を……兄上。貴方を倒した後、必ずや私の手で鬼を殲滅して見せます故。今は静かに……眠ってください。私は刀を振り上げた。

「巖勝兄上……さらばです」

「っ……」

(ペペンツ)

「……?」

私の刀が兄上の頸をはねようとした刹那、どこからか三味線の音が聞こえたと思った。ら……目の前から兄上が消えていた。

「消えた……か。逃してしまったな……不甲斐なし」

どこか不快な気持ちになりながら、私は刀をしまいその場を後にしたのだった。

其ノ拾 産屋敷耀哉

「黒死牟．．．．．お前ともあろう者がなんたる無様な姿を．．．．．」

「くっ．．．．．もうしわけ．．．．．ごさいませぬ．．．．．しかし、あの者は間違ひなく私の弟、昌継であります！貴方様を追い詰めた縁壺と同等以上の力を持つ剣士でございます！このままでは私たちはいずれ．．．．．」

「誰が口を開いて良いと言った!!」

「ぐっ！」

無惨は鳴女（無惨の近くにいつも居る琵琶の力によって対象の者を転送させることができる力を持つ女の鬼）の力によつて無様な姿で戻つてきた黒死牟を自身の爪で切り裂

きながら見下ろしていた。だが、気丈に振る舞って見せている無惨も内心では今までに無いくらい焦りを見せていた。

「私の次に力があるであろう黒死牟をこども簡単に退けるとは．．．．．っ!? なんだ？」

ふと自分の異変に気付いた無惨は異変を感じた自身の足に視線を移してみた。すると映ったのは、自身の両脚がまるで生まれたての小鹿のように小刻みに震え、体に少しでも衝撃を加えれば簡単に倒れてしまうのでは? と錯覚できるほどにおぼつかなくなっている様子だった。

「私が．．．．．震えているというのか．．．．．? たかが一人の人間の剣士如きに．．．．．」

その日、無惨は一頻り継国昌継という鬼狩りに恐怖し、それ以降青い彼岸花の調査にありつくことは無かった．．．．．。

「昌継様……お客様が見えております」

「客？わかった。すぐ向かおう」

巖勝兄上を取り逃した数日後、我が家で刀の手入れをしていた折、寿々から来客の知らせを受けた私はすぐさま外に出た。外にいたのは雪のように白い髪をし、何とももの静かそうな雰囲気醸し出した御人だった。……このような御人が私に何用か？

「初めまして。私は産屋敷当主、産屋敷耀哉の妻のあまねと申します……………」

「産屋敷……………今の世でも受け継がれているのだな……………」

私の時代からその名は存在していたほど、産屋敷の名は歴史がある。私が知っているのは僅か六つで当主の座についた当時の御館様だけだ。あのお方がその後どうなったのかは知らぬが、四百年経った今の世でもその名があることからどうやら子孫を残せたようであるな。だが、今の世で私は鬼殺隊に入っているわけでは無い。産屋敷の者共と直接的な関与は無いものと思っていたが、どういうことなのだろうか？

「それで……………産屋敷の者が私に何か御用であるか？」

「はい。実は貴方様に御館様からの伝言を伝えるべく参りました」

「ふむ。……………して、伝言とは？」

今の世の当主が私に伝言とは……………。私は続きを促した。

『私の屋敷に来てもらいたい。そして私と話をしよう……』……これが伝言です」

「ほう？話とは具体的に何を話すのだ？」

「そこまでは伝えられておりません。それは御館様に直接会われてから問うべきかと……」

「……」

私は迷っていた。特段断る理由も無いのだが、一途の不安が募っているためであった。それは、寿々と可奈の存在だった。私が一人赴けばその間二人を守る者が居なくなってしまう。今までは一晩の短い間のみ鬼狩りをしてすぐ様家に戻ってくるというやり方をしてきた為、問題なかったが、産屋敷家の館が私たちのいた時代と相変わらずの場所であるのなら丸二日はかかる。その間二人を野放しにすることなど私には到底出来ないのだ。

「貴方様のご家族にしましてはご安心を。お二人は貴方様とともにこちらに来てもらい、産屋敷家の管轄内で保護をさせていただきますので……」

「……それは真か？」

「はい。鬼は近づけない作りの場所となつていますので襲われる心配もありませんし、少なくとも今いるこの場よりも安全ではありません。……どうでしょうか？私と共に来てもらえますか？」

再びあまねは問うてきた。確かに私はいずれ、この場を離れようとは考えていた。鬼狩りをする以上一時も二人から離れずに守るということは不可能に近い。いつ鬼に襲われるか分からない状況で二人だけにするのは危険である。だからこそ二人だけで置いておいても安全な場所を探し求めていた。そして今、その場所が目の前にいるあまねから渡されようとしている。……もはや私に選択肢は無かった。

「……わかった。ともに行こう。しばし待たれよ、家内に支度をさせてくるので

な・・・・・・・・」

「理解、感謝いたします・・・・・・・・」

私はそのまま家に入り、寿々と可奈に先程あまねから伝えられた事をそのまま話した。渋るかと思われたが、実際そうでもなく『昌継様がそう決めたのならば、どこまでも私たちはついて行きます・・・・・・・・』と承諾してもらえた。可奈も静かに微笑みながら私の手を握った。ああ・・・・・・・・私は本当に良い妻と娘に恵まれたのだな・・・・・・・・この笑顔を決やさぬためにも、私は鬼を狩らねばな・・・・・・・・。

そして、私たちはその土地を離れ、産屋敷の館に向けて歩みを進めた。・・・・・・・・産屋敷、今の世ではどの様な者であろうか？

「やあ、待っていたよ……」

産屋敷の館の静寂……正確には鹿威しの音のみが大きな庭に静かに鳴り響く
中、物腰柔らかに消え入りそうな声が響いた。

「お初にお目に掛かります。私は継国昌継という者……しがな鬼狩りでありま
する……」

「うん、昌継だね……。私は産屋敷当主、産屋敷耀哉。よろしくね。それじゃあ、
早速だけど私と話をしようか……」

私は平伏した姿勢をとき、その場に座った。今この場にいるのは私と御館様のみで、

寿々と可奈は今は産屋敷家の部屋で休ませてもらっている。丸二日かけてここまでできたのだ、それくらいはさせてもらおう。

「昌継は以前、上弦の壺の鬼と遭遇してその鬼を撃退した……これは事実でいいかな？」

「さて？その上弦？とやらの鬼は存じ上げてはおりませぬが、少し前に鬼になられていた我が兄を逃しましたな……」

「うん、その鬼であつてるよ。君が逃したその鬼は……鬼の始祖、鬼舞辻無惨の次に力がある上弦の壺の鬼だったんだ。まさかその鬼が君の兄だとは思ひもしなかったけどね……」

「そうでありますか……」

私はいまだに巖勝兄上が鬼になられた事に納得がいていなかった。私が見つけている巖勝兄上は誇り高くどこまでも真つ直ぐで私の目標としていた御人だったからであ

る。そのような御人が何故鬼という醜い存在に……？巖勝兄上の考えが理解できない私に、御館様は今度は違う話題を持ちかけてきた。

「で、昌継はこの時代の人じゃ無いよね？雰囲気とかで見てもとてもこの時代の人とは思えない。それに何百年と生きてる上弦の鬼に兄弟がいる時点でおかしいよ……。聞かせてくれるかな？君が……いや、君たち家族がいつの時代から来たのか……」

「御館様にはかないませぬな。わかりました……すべてお話しいたしましょう」

それから私は自分たちのみに起こった事を全て話した。納得して貰えるかは未知数であったが、全てを聞いた上でも御館様は何も疑うそぶりを見せずに相槌を入れつつ、私の方を見ていた。

「そうか、それは災難だったね……。でも、私は嬉しくも思っているよ」

「……？それはどういう意味でしょうか？」

「この時代で、鬼を絶やすことができる……。昌継ほどの力を持った子が居れば、きつと鬼舞辻無惨を倒すことができるし、私の子供達も無闇に死ぬこともなくなる……。だからこそ嬉しく思っているんだよ……。君がこの時代に来てくれて……。」

御館様の言葉に途中から力がこもっている事を実感した。無理もない……。ようやく長年続いた鬼との因縁を断ち切れる好機が来たのだから……。だがそれは私とて同じ事、私もこの美しい世、そして人々の平穏を守る為に戦っているのだから……。だから私は……。」

「御館様……この時代を、鬼舞辻無惨の……鬼の終焉とさせましょう。その為とあらば私はいついかなる時も修羅となる覚悟がございます。どうか私も共に戦わせてくださいませ……。」

「ありがとう。もともと私がお願いをする予定だったんだけどね……。改めて昌継、この世の未来のため、私たち鬼殺隊と一緒に戦おう。これからよろしくね？」

「……おまかせを。必ずや日の本に平穩を……」

こうして私は鬼殺隊と共に戦う事となった。これから先幾度も死線を潜ることとなるだろう。だが私に不安は無かった。なぜならば、こちらには頼もしい味方、鬼を滅する集団……鬼殺隊がいるのだから。

そんなある日だった……。私は突如、御館様の屋敷に呼ばれた為、屋敷に赴いていた。そこにいたのは御館様だけかと思っていたのだがその予想はずれ、屋敷には数人の鬼殺隊の隊員と見える者達が私に訝しげな顔を見せつつ佇んでいた。

「御館様……継国昌継、参上つかまつりでございます……。……。……して？今日はどのようなご用件で？」

「ああ、よく来てくれたね昌継……。今日はね？君のことを私の可愛い子供達に紹介したくて来させたんだ。君は正式な鬼殺隊じゃ無いけど、今後彼らと共に戦う仲間だからね。顔合わせぐらいはさせたいと思っていたんだよ」

「そうでございませうか……。」

私はそつと御館様から目を逸らし、隊員達の方に視線を向けた。どの者もかなりの才を持った者だと言うことはひと目見ただけでわかった。若い者が多く、まだまだ未熟なところもあるがその分伸び代も計り知れない。そのような者がこの場に行く人も存在している事実自然と私の口角は吊り上がっていた。この時代にもまた、私を凌ぐ才や

劍技を持つ未来ある若者達が多く存在しているのが嬉しかったのだ……。 (↑2
2歳)

「昌継さん！」

「お久しぶりですね」

「其方達……。久しいな。息災であつたか？」

「はいっ！」

私に声をかけてきたのは、以前よりも更にたくましくなり、纏う雰囲気も一端の劍士となつていた錆兎と義勇だった。

「俺たちあれからさらに修行を積んで、鬼を狩り続けたんですよ！昌継さんの教えを基にし、自分を磨き直したところ、苦戦はしましたが十二鬼月に一人を二人で倒すことが出来たんですよ！」

「ほう？十二鬼月を……」

「はい。それとかなりの鬼を狩っていた事もあつて一ヶ月前に俺たち二人は晴れて〃柱になることが出来ました」

「む？〃柱……とな？」

聴き慣れぬ言葉に私は疑問を抱いた。

「簡単に言えば鬼殺隊の階級の最上位のことを表しています。全部で十階級あり、下から……癸・壬・辛・庚・己・戊・丁・丙・乙・甲……そして最後に〃柱」となっています」

「今の世の鬼殺隊は階級という概念があるのだな……」

「はい。柱になる条件として、まず階級が甲であることと、十二鬼月もしくは鬼を五十体

倒すことが絶対条件です。ですので、この柱になるということはかなり難儀なことなんです………」

「そうか………」

何故難儀なのかは敢えて聞かなかった。大体は私は想像がついたからだ。つまりその条件を満たす前に大半の隊員達は鬼どもに命を奪われてしまうのだろう……。いくら鬼狩りを仕事としていて一般のものと比べて鍛え上げられた隊員達であっても人間であることに変わりはない。急所を疲労かれたり、不意を突かれたりしたら簡単に命を落としてしまう。まして鬼などという愚物共なれば卑劣な手段など当たり前のように使うだろう。そのような手で殺されてしまったこれまでの隊員達のことを思うと私は悲しくなつてくると共に怒りが伴ってきた。

「……やはり鬼共は許してはおけんな」

「……」

私が出した一瞬の殺気に気がついたのか、靖兎と義勇を含めた隊員達は体を硬らせながら腰を落として身構えていた。……何故か申し訳ない気になってしまったな。

「すまぬな。脅かしてしまったか？」

「い、いえ……大丈夫です……（一瞬呼吸ができなかった……）」

「も、問題ありません……（鬼達でさえ、こんな殺気出してきたこと無いぞ……）」

二人はこう言っているが、見たところ呼吸が乱れている。やっぱりまだ完璧な呼吸と使い方は会得できてないようだな……。そこもまた今度教えてみる事もまた良いだろう……。私はまたふと笑みを浮かべると、今度はまた違う二人が近づいてきた……。む？その二人は男女の様であるが、彼奴らはどこか見覚えがあった。

「お久しぶりですね昌継さん。一年半ぶりくらいですか？」

「其方は……確か無一郎であつたな。其方も息災であつたか……して、兄である有一郎はどうした？」

「兄さんは今は任務中なんですよ。今度昌継さんに会いに行く様伝えますので楽しみにして下さい！それと、僕もまた柱になりましたよ！」

「そうか……」

二人のうちの男の方は、以前山の中の家で世話になつた無一郎だつた。以前と比べて顔が引き締まっていたが、それでもまだ子供っぽさが残っていて、なんとも可愛らしかつた。無論“柱”となつているだけあつて、剣技も相当なものとなつている事だろう。まだ見ぬ有一郎もまたそうなのであろう……。

「ほら、カナエさんも挨拶しなよ。ずっと会いたかつたんでしょ？」

「ええ、そうですね。．．．．．お久しぶりですね、昌継さん。私のこと．．．．．覚えて
いますか？」

「其方．．．．．確か鬼に襲われているところを助けた女子であつたな。名前は．．．．．
カナエで良かったか？」

「まあ、覚えていてくださつたんですね！あの時は本当に．．．．．」

「礼には及ばぬ。其方の様な未来あるものを死なすにはいかなかったのな．．．．．」

「ありがとうございます。あの時から自分の無力を知った私は必死に努力しましたよ。
逃げ出したくなるくらいに．．．．．でも、それを成し遂げて今私は“柱”として
貴方の前に立つことが出来ています。それもこれも昌継さんがあの時私のことを助け
てくださったおかげです。．．．．．もう一度言わせていただきます。あの時は本当
にありがとうございます。そして今後は私たち鬼殺隊と共に鬼と戦っていきましょ
う」

あの時助けた女子がここまでの成長を遂げているとは……この者とは二年近く会うことは叶わなかったが、その間にこの者は本当に壮絶な修練を積んで来たのであろう……。体のあちこちが目に見えぬほどの傷で覆われていることが何よりの証拠だった（昌継は“透き通る世界”で傷が見えているだけであつて、他の人たちからは傷一つ見えない）。

「ああ、其方達の様な者達と共に戦えること、光榮に思おう。そして我が身にかけて誓おう。私も全身全霊をかけて其方達と共に鬼共を駆逐することを。そしてこの美しい世に平穩をもたらすために戦おう……」

「どうやら自己紹介は済んだみたいだね。仲良く出来そうで安心したよ。それじゃあそろそろ……」

御館様が、そろそろ次のことへと移ろうと話を切り出そうとした……。その時だった。一人の隊員から制止の声が上がったのだ。

「御館様、暫しお待ちを……」。この俺はこの者は信用できませぬ……」

和やかに終わるかと思われたが、どうやらそれは叶わぬやもしれぬな……」。

其ノ拾貳 實力の差

「其方は……………」

私を含めたその場にいた者全員が其声の主の者の方へ視線を向けた。視線の先に居たのは……………灰色に近い白髪をし、鋭い双眼をギョロつと私に向け敵意を剥き出しにした一人の若い隊員だった。

「不死川さん……………御館様の御前ですよ？少し抑えてください……………」

「承知の上だ……………。おいテメエ……………どこの誰かは知らねえがあ、ここはテメエみてーなひよろつちい野郎が来る様な場所じゃねーんだよお……………御館様も御館様だ。何故この様な男を共に戦う同士などと……………」

「うむ！確かにそれには俺も同感だ！御館様の命と言えど、納得できん！」

やはりと言うべきか、全員が全員私と共に戦うことをよしとは思っていない様であるな．．．．．。わかつていたことであるが、少々嘆かわしい．．．．．。

「まあこうなることは分かっていたよ。要はみんなは昌繼のことが信用できてないってことだよね？」

否定した隊員達が即座に首を縦に振る。

「分かった。じゃあこうしよう。これからここにいるみんなには一人ずつ昌繼と立ち合ってもらおう。それで、昌繼に一太刀でも浴びせたらみんなの勝ち、今後昌繼のことに関しては何も言わない。でも、浴びせられなかったら．．．．．昌繼に対する評価を改めてもらうよ?．．．．．それで良いかい？」

「ふむ．．．．．私は構いませぬ。私もこの者たちの力を見てみたいと思つていたところでありますので．．．．．」

御館様の案に私は躊躇なく賛成した。私も共に皆と戦う以上、実力を知らぬ者に背中を預けることなどしたくは無かった。だからこそこの御館様の案には私は賛成したのだ。

「ああ……御館様の考えはよくわかりませぬ……。だが、わかり申した……。受けて立ちましょう……。」

「決まりだなあ！おいテメエ！さっさと準備しやがれ！叩き潰して二度とこの場に来させない様にしてやるからよお！」

「御館様がそう言うのであれば俺も参戦しよう！」

「よくわかんねーが、派手に終わらせてやるか！」

「どうやら他の柱の若者達も賛成の様である。さて……この者たちの実力は如何程か……。」

「「」．．．．．みんな、無事だと良いけど．．．．．」」

昌継がそんな呑気なことを考えている中、昌継の力を知る錆兎、義勇、無一郎、カナエは苦笑を浮かべながら他の柱たちの身を案じているのだった．．．．．。

対 不死川実弥

「其方．．．．．名を何と言う？」

「俺は風柱の不死川実弥だあ！継国って言ったかあ？俺を認めさせてーならこの俺に一本でも打ち込んで見せろやあ！まあ．．．．．それはできねーだろーがなあ！！」

不死川と名乗った若者が私の迫ってきた。風の柱と言うと、この者が使う呼吸は“風”で間違いないか？これもまた縁壺兄上の呼吸の派生の呼吸であるが、やはりどこか異なるものなのであるな……。

「風の呼吸・参の型【晴嵐風樹】!!」

渦の様になった斬撃が私の身に襲い掛かる。普通の剣士ならば簡単に切り刻まれて終わりだろう。この様な若者がこれほど見事な剣技を持っているとは……なかなかに面白い。

「ふっ……」

「なっ!?!」

私は迫りくる斬撃を、自らの刀で横なぎに一閃し相殺させた。確かに筋はいいのであるが、まだ修行が足りていない様であるな……。

「・・・・・・・・・・終わりか？」

「ちっ・・・・・・・・・・風の呼吸・壺の型【塵旋風・削ぎ】！」

「・・・・・・・・・・」

「っ!!」

また新たな技で私に向かってきたが、私に攻撃を加えようとした時のわずかな隙を私は済んでのところで見切り、攻撃を躲すと同時に鳩尾に一撃喰らわせてやった。鳩尾への重い一撃をまともに喰らった不死川は腹部を押さえながら膝をつき、こちらを見上げていた。

「・・・・・・・・・・まだやるか？やるのならばこちらもう少し力を出すが・・・・・・・・・・いかがする？」

「・・・・・・・・・・いや、いい。いくら俺でもこれだけのことでされて実力差が分からねーほど

馬鹿じゃねえ………俺の負けだ」

勝者 継国昌継

対 煉獄杏寿郎

「名を聞かせてはもらえぬか？」

「俺は炎柱、煉獄杏寿郎だ！俺はお前のことを認めてはいないが、御館様があそこまで言うのならばそれ程の手練れだと言うことだな！………ならば！それを俺に見せてみろ！」

「ほう？………炎か………」

炎の呼吸もこの時代まで継承されてきた様であるな……途絶えてしまつて
いては困るとは思つていたが杞憂であつたな……。

「行くぞ！ 炎の呼吸・壺の型【不知火】!!」

「炎を纏う劍技とは……縁壺兄上もまた、面白い呼吸を学ばせたものであるな……」
私は煉獄と名乗つた若者の劍技に惚れつつ、その斬撃を軽く受け流した。

「っ！……やるな！ では！ 炎の呼吸・弍の型【昇り炎天】！」

下から上へと斬りあげる形で私に炎の斬撃を浴びせようとして来たが、私はそれを
真つ向から刀で受け止め、そのまま峰で小手を打ち、煉獄の刀を打ち落とした。

「悪くはない……だが、まだまだであるな……」

「うむ！負けたか！どうやら御館様の言っていたことは正しかった様だな！継国昌継！俺はお前のことを共に戦う同士として認めよう！」

勝者 継国昌継

「・・・・・・・・見えたか？今の・・・・・・・・？」

「いや・・・・・・・・まったく・・・・・・・・」

其ノ拾参 和解、そして・・・・・・・・

対 宇髓天元

「煉獄と不死川を負かすとはな。俺は派手にお前のこと気に入った！ぜひとも俺とも手合わせ願いたいもんだ！」

「ふむ。よかろう・・・・・・・・其方、名は何と言う？」

「俺は宇髓天元。言つとくが手なんか抜くんじゃねーぞ？」

「・・・・・・・・わかった。来るがいい・・・・・・・・」

天元と名乗った目の前の剣士と私は互いに距離を取り、刀を向けあった。・・・・・・・・
緊迫とした空気が屋敷の庭中に流れる中、先に動きを見せたのは・・・・・・・・
天元だった。

「行くぞ！」音の呼吸 壺の型【轟】！」

「……………」音？聞いたことのない呼吸であるな……………」

縁壺兄上が教えた呼吸の中に“音”などと言う呼吸はなかったことに疑問を持つ私だったが、今はそのことは置いておき、この立ち合いに集中することにした。天元が放った斬撃は轟音を立てながら私に襲いかかってきたが、私はその斬撃を横殴りに一閃して相殺して見せた。

「っ!?!……………まじかよ？こいつは派手に驚いたな……………」

「面白い呼吸だが、まだ踏み込みや刀をふる腕力、そして呼吸のやり方がまだまだ未熟であるな……………今度はこちらから行くぞ？」

「……………」

私が攻撃の態勢に入ると、天元も同時に守りの態勢に入った。だが、私はそれを気にするでも無く攻撃に移った。

“光の呼吸” 【煌】

「なっ!?!光で前が・・・・・・・・・・あつ・・・・・・・・・・」

「勝負あり・・・・・・・・・・であるな?」

私は天元の背後から喉元に刀を突きつけながらそう言う。簡単にこの型のことを話すと、この型は他の型と比べて光の出る量が違く、その光に目が眩んだところで敵の背後を突くと言う少し変わった型だ。私のこの呼吸は、振る力が強ければ強い程より光が増し、技の威力も上がるためその場で振る力を変えているのだ。むやみやたらに余計なものを斬ってはかなわぬからな。

「ああ。そうみたいだな。・・・・・・・・・・ったく、もう少しやれると思ってたんだがな」

「其方には素晴らしいまでの才がある。もつと鍛錬に励めば、いずれは私をも超える剣士になれるであろうな」

「はは！お前をか？．．．．．そうだな。いずれはお前を超えてやるぜ！覚悟しとけよ？」

「ああ．．．．．楽しみにしておこう．．．．．」

私と天元は、互いに笑い合いながら手を取り合つた。天元．．．．．其方とも良い関係になりそうであるな．．．．．。

勝者 継国昌継

対 非鳴嶼行冥

「さて・・・・・・・・残るは其方だけの様だが、如何様にする？」

「私も、始めはあなたとあいま見えようと考えていたが・・・・・・・・やはり、私はやめておこう」

「ほう？私は一向に構わぬが？」

今までの者達とは違い、立ち合いはせぬと言うこの剣士に私は少し興味を持つていた。見る限り、目が見えていない様で剣士としては致命的とも思えるのだが、その代わりに熟練度や風格、体つきなどはこの周りにいる柱達の誰よりも優れていると思えたからだ。

「私は既にあなたのことは認めている。これ以上無益な戦いは不要、そう判断したままで・・・・・・・・お館様も、それでよろしいか？」

「行冥が昌繼のことを認めてくれたなら、これほど嬉しいことはないよ。わかった。．．．．．行冥の好きな様にしていいよ。昌繼もそれでいいかい？」

「わかり申した。．．．．．では改めて、其方の名を聞かせてはもらえぬか？」

私が静かにその者のもとに歩み寄ると、向こうも立ち上がり私のもとに歩み寄ってきた。

「私は非鳴嶼行冥。これからよろしく頼む．．．．．昌繼よ」

「ああ。こちらこそよろしく頼む．．．．．」

行冥と名乗った剣士と私は先ほどと同じく、静かに手を取り合う。．．．．．後で
行冥には使う呼吸を教えてもらいたいものだ。

行冥 立ち合い拒否のため

勝者 繼国昌繼

全ての柱たちの信頼を得ることができた私は、刀を収めた後、ゆっくりとお館様に向き直った。

「どうだい？まだ、昌繼のことを信じられない子はいるかな？」

「「「「・・・・・・・・「」」」」

お館様はそう問うが、その問いには誰も反応を示さなかった。・・・・・・・・どうやら問題はなさそうであるな。

「ありがとう。．．．．．じゃあ、昌繼。自己紹介をしてくれるかな？」

「承りました．．．．．」

私は体の向きを反転させ、柱たちの方へ向けた。柱たちは先ほどの嫌疑のような視線ではなく、まるで同志を見るような輝かしい視線を向けていた。

「知っている者も中にはいるようだが、改めて言わせてもらおう。．．．．．私は継国昌繼。．．．．．信じられぬかも知れぬが、私はこの時代の人間では無いのだ」

「「「「「つ?!」」」」」

「．．．．．」

私のその発言に、既に知っているカナエ以外は激しく動揺をしていた。

「嘘・・・・・・・・・・だろ？」

「そう思うのは無理なものかも知れぬが・・・・・・・・まことなのだ。・・・・・・・・この継国と言う名が証明にならないか？」

「継国・・・・・・・・!! 私たちの呼吸の原点とも呼べる・・・・・・・・だが、その名は途絶えたはず・・・・・・・・」

どうやら行冥は知っていた様で、さらに動揺をあらわにしていた。

「そうだ。其方達の原点となった呼吸、〃日の呼吸〃を使っていた剣士、継国縁壺は・・・・・・・・私の兄なのだ・・・・・・・・」

「「兄!」」

再び驚きを示す柱たち。その後私は、今までのこと、私たちの身に何があったのかを全て話した。最初は到底信じられないと言った顔つきをしていた柱達だったが、話を聞

いているうちに、私が嘘をついているとは思えなかったのか、納得をしたかの様な顔つきになっていた。

「・・・・・・・・始まりの呼吸が、実はもう一つあったなんてな・・・・・・・・で、その呼吸の使い手が昌継さんだったと・・・・・・・・」

「その兄上の様に呼吸を教えようとする前にこの時代に異形の鬼によって飛ばされてしまったと・・・・・・・・」

義勇と鯖兎が私の話を簡潔にまとめ上げながら私に確認を求めてくる。

「そうだ。・・・・・・・・出来れば納得してくれると嬉しいのだがな？」

私は柱達に視線を泳がせる。私のことは嘘偽りなく話したつもりだ。あとはこの者達が信じてくれるかどうかだ。

「私は元から信じてますよ？・・・・・・・・というか、あの山で会った時から信じてました

よっ。」

「俺ももちろん信じる！仲間を信じられぬ様では柱としても人としても未熟だからな！」

「にわかには信じられぬが……あなたがとても嘘をつく様な方とは思えぬ……信じよう」

「よくわかんねーがあ……いいぜ、信じてやるよお……」

「こまけー話はいいだろ？昌継だ誰だろうとこんなすげー奴が仲間になるってんだ。俺は派手に大歓迎だ！」

「正直びつくりしたけど、昌継さんなら信じられるかな」

「昌継さんに嘘は無いと踏んでました。ですから、俺は当然あなたを疑いませぬ！これからどうぞかよろしくお願いします！」

「俺ももちろん信じます」

柱八人、全員から信用の意を示された私は、途端にどこか安心し胸を撫で下ろした。

「自己紹介が終わったみたいだね？．．．．．じゃあ改めて、みんな．．．．．これからは昌継とともに、鬼達を．．．．．そして鬼舞辻無惨を倒そうね？」

「「「「「「御意!!」」」」」」

こうして私は．．．．．本当の意味でこの時代の鬼殺隊の一員に加わることとなった。これから先、どんな困難が待ち受けているかはわからない。だが、私はこの者達がいれば、どんな困難も苦難も乗り越えられると信じている。

・・・・・・・・待っているが良い、鬼舞辻無惨。近い未来・・・・・・・・必ず貴様のその
頸を撥ねてやろう・・・・・・・・。

その思いを胸に・・・・・・・・今日も私は、鬼を狩りに走るのだった・・・・・・・・。

其ノ拾肆 一本橋での激闘

私が晴れて鬼殺隊の柱達に認められ、共に鬼どもを狩る様になってもう時期数ヶ月が経とうとしていた。私の鬼殺隊の立場としては、特に決まりはないようでの階級にも属さない特別なものとされている様だ。．．．．私のようなどこにもいる様な馬の骨が柱になってしまつては、他の隊士達に申し訳が立たないからであろうな。

柱の者達とは、あの時會つて以来頻繁に交流を深めていて、互いに鬼の情報を共有し合つたり、互いに劍を交えたりして技の練度を磨いたり、世間話をし合つたりなどをしていた。時たまに私の屋敷にやってきて、寿々の手料理を共に堪能したりもした。その様にして、柱達と友好な関係を築いていきながら、私は日々を楽しむ様にして過ごしていた。

そして、鍛錬の方なのだが．．．．あの日以来、毎日の様に柱の者達（特に杏寿郎、天元、実弥）が私に教えを乞うてきたため、私は自分のやり方ではあるが、呼吸の

仕方を伝授した。最初はやはりというべきか、呼吸がうまく出来ずに失敗することが多々あったが、さすがは鬼殺隊の柱になった者達というのもあってか、始めてから一月足らずでその者達は呼吸を習得した。この呼吸の仕方ができることで、少なくとも今よりも技のキレや威力などは上がる。今後予想外の鬼と出会った時のための私なりの配慮だった。そして、以前に錆兎や義勇に習得させた“光の呼吸”【光天の舞（劣）】も、半ば強引に柱達に習得させた。その間の修行が地獄だったことは言わずもだが……（これもまた習得に一月）。

そんなドタバタな日常を送りながら、鬼を狩っていたある日だった。いつもの様に任務で鬼を狩り、屋敷に戻ろうとしていた私のもとに、お館様からいただいた、鏝鴉が急報を知らせにきたのだ。……何か嫌な予感を感じた私は、自分の腕に鴉を止まらせると、急報を聞いた。

「カー！急報！急報！南南東ノ村ニテ花柱ガ上弦ノ式ト抗戦中！！近クノ隊士ハ応援ニ向カエー！」

「花柱……カナエか。……あいわかった。すぐに向かうとしよう……」

鴉を放した私は、すぐさま目的のその街へと向かった。上弦の鬼のことは、お館様から聞かされている。．．．．．なんでもここ何百年の間、その鬼と遭遇したものは、誰一人としてその者らを倒すどころか生きて帰ることすらできてないらしい。先日会った巖勝兄上もその類に該当するらしいのだが、今はそれは置いておくことにした。今は何よりカナエの元に急がねばならなかったからだ。カナエも柱としてはかなりの実力者であり、私も少しだが手ほどきをしてあるためある程度の相手ならば問題なく相手にできる。．．．．．だが、相手は上弦の鬼。勝てる保証も、負ける保証も、死ぬ保証も．．．．．生きて帰れる保証も無い。だからこそ、私はカナエのもとへ向かわなければならなかった。．．．．．

「カナエよ。．．．．．其方はまだ散るべき時ではない。．．．．．早まるでないぞ？」

先ほどよりも走る速度を上げ、私はカナエのもとへ急ぐのだった。

その頃……件の村の外れにある一本橋にて、花柱である胡蝶カナエはある鬼と対峙していた。その鬼は一見すれば洋風の着物を着たすらつとした好青年で、一部の女性であれば一目惚れもするのでは無いかと錯覚するほどの美貌を持ち合わせていた。だが、その虹色の双眼の瞳に“刻まれている文字”が彼を鬼だと決定付ける証拠となっていた。その瞳には……【上弦の弐】と刻まれていた。

「ねえ？あなたは人間と鬼は仲良くできると思っているかしら？」

「ん？いきなりどうしたのかな？そうだね……それは無理なんじゃないかな？人間は俺たち鬼のことを斬ろうとするし、俺たち鬼は人間を食べないと生きていけない。だから、結果的に俺たちは争う関係にあるわけだからね」

「そう。でも、私はいつかは人間と鬼が仲良くできると思っているわ。……まだ何も根拠はないけれどね？」

「はは！キミって面白いね！名前は……カナエちゃんだっけ？……キミみたいな子を見てるとすごく俺が救済したくなるんだよね〜！」

救済と言った途端、その鬼の纏う空気が変わったことに気がついたカナエは、身構える。

「……あなた、名前は？」

「俺は童磨。よろしく！じゃあカナエちゃん！早速キミのことを救ってあげるからね！」

童磨と名乗ったその鬼は、手に持っていた鉄の扇子をぱらつと広げると、その扇子で自身の腕をすつと斬った。

「っ？……何を？」

「ははー！こうするんだよー！」

童磨は腕から流れ出る血を吐息で霧状に凍り付かせると、その血をカナエに向けて扇子を使って飛ばしてきた。

「血鬼術【粉凍り】」

「っ!!（吸ったらずい!）」

咄嗟に不気味な予感を感じ取ったカナエは、一步後ろへと退き童磨とその霧から距離をとった。

「花の呼吸」陸ノ型【渦桃】！」

カナエの放った技が渦を巻く様にしてその霧を打ち消していく。カナエのこの判断は正解で、もし仮に違う型を使っていた場合、その霧に巻き込まれ…….肺を壊死させていただろう。以前、この型をこの様な形で防御に応用できないかと昌継

とカナエは話し合っていて、すでに実践していたため今回咄嗟ではあっても出すことができたのだろう。

「へえ〜？面白い呼吸を使うんだね？まだまだいくよ！血鬼術【枯園垂り】」

「くっ!!・・・速い！」

童磨の冷気を纏った鉄扇がカナエを襲う。先ほどまで遠距離にいた童磨だったが、一瞬にしてカナエとの距離を詰め、鉄扇を使った近接攻撃を仕掛けてきたのだ。あまりの速さに一瞬反応が遅れたカナエは、童磨の攻撃を受け止めることは出来たものの、力で勝る童磨に押し切られ、尻餅をついてしまう。

「さて、そろそろ救済の時間かな?・・・ふっ!!」

「・・・・・・」 光の呼吸 【光天の舞（劣）】!

「おっと?・・・また見たことのない呼吸・・・やっぱりキミはすごいよ！」

カナエちゃん！ますます俺が救済したくなつたよ！」

昌継から伝授された“光の呼吸”【光天の舞（劣）】で何とか童磨の攻撃を弾いたカナエは、素早く立ち上がると再び童磨から距離をとつた。

「（正直言つて……私じゃこの鬼には敵わない。いくら昌継さんに教えを受けていたとしても、私じゃせいぜい時間稼ぎができれば良いところかしら？）はあつ！”花の呼吸” 弐の型【御影梅】!!」

「良い動きだね！でも惜しいね〜？」

「くっ……身のかなしまで化け物？」

カナエが必死になつて放つた技も童磨には全く通用せず、ひらりと躲かされてしまう。それだけでもカナエは察してしまふ。この鬼と自分の実力の差に……。

「ちよつと本気を出そうかな？ 血鬼術【冬ざれ氷柱】！」

童磨が鉄扇を上に掲げると、カナエの頭上に巨大な氷柱がいくつも現れ、それがカナエの元に降り注ぐ。

「ひ、〃 光の呼吸〃 【光天の舞（劣）】・・・きやつ!!」

同じく光天の舞で凌ぐとしたカナエだったが、全部を凌ぐことは出来ずに一部の攻撃を受けてしまう。いくら【光天の舞（劣）】を使えるとはいえ、やはり昌継の様な完全なる【光天の舞】には遠く及ばぬため、上弦並の鬼相手だと全ての攻撃を受けることは出来ないのだ。

氷柱の攻撃を足に受けたカナエは、足を引きずりながらも立ち上がるが、もはや戦うことは不可能に近く、勝敗は目に見えていた。

「今度こそ終わりみたいだね？でも安心してよ。キミの存在はずつとこの俺の中に残り続けるからさ！」

「くっ……（しのぶ……カナヲ……柱のみんな……お館様……昌継さん……ごめんなさい……）」

童磨が再びカナエの元に氷柱を落とそうとしている中、カナエは静かに目を瞑り、死を覚悟する。

……だが。それを許さぬ者がこの場に現れた。

「カナエよ．．．．．よくぞ持ちこたえてくれた。後は任せるが良い．．．．．」

「えっ．．．．．」

カナエの目の前に現れたその人物．．．．．それは、カナエや他の柱達が尊敬をし、仲間として共に鬼と戦っている心強い味方．．．．．継国昌継だった。

其ノ拾伍 激闘の行方

「カナエよ……よくぞ持ちこたえてくれた。後は任せるが良い……」

件の村に着くこと数分、目的であったカナエを見つけた私はすぐさまその場に駆けつけ、カナエを庇う様に上弦の式らしき鬼の前に立った。何やら私たちの頭上から氷の柱の様なものがいくつも降り注いできているが……。

「この程度の攻撃など……」光の呼吸「【輝月蓮華】！」

私にとって、問題はさして無かった。これだけの量の氷の柱が降り注いでくるのであれば、一つ一つ壊すのではなく、一度にまとめて壊してしまえば良いだけの話だったからだ。そのような時にこそ、この広範囲を射程範囲とする【輝月蓮華】が生きてくるのだ。

予想通り、私が放った幾多の光輪の斬撃は眩い光を放ちながら、降り注ぐ全ての氷の

柱を壊していった。全ての柱を壊した私は、目の前の上弦の鬼には目もくれず、カナエの方へ視線を向けた。

「無事であるか？見たところ、足を負傷しているようだが？」

「大丈夫です。少し斬られただけですから……それにしても、相変わらず昌継さんは凄いですね？さっきの攻撃をこんな簡単に……」

「何を言う……私など……縁壺兄上に比べればまだまだ未熟……」

「過度な謙遜は嫌味になりますよ？……全く、昌継さんはもつと自信を持つてください」

「……？そうか……わかった」

どこか呆れたように言うカナエに私は首を傾げながらも頷く。これだけ話せるほど元気であれば、とりあえず大丈夫であろう。それだけでもわかった私はカナエを退かせ

た後、ほっと息を吐く。そんな中、蚊帳の外であった目の前の上弦の鬼が口を開いた。

「ねー？急に来たけど．．．．．キミ、誰かな？今、カナエちゃんを救ってあげようとしてるんだから邪魔しないで欲しいんだけど？」

「救う？．．．．．ほう？其方がどのようにしてカナエを救うと言うのだ？」

「ん？決まつてるでしょ？．．．．．喰べるんだよ！それでその子は救われるんだ！」

「．．．．．」

私の刀が赫みを帯びていく．．．．．私の鞘を握る手の力がどんどん強くなっていくせいだ。

「人間は誰しもいつ来るかわからない死に怯えてる。だから俺が喰べてあげてるんだ！そうすれば、俺の中で一緒に生きていけるでしょ？だからみんな幸せなんだ。」万世極楽教の教主として、これほど嬉しいことは．．．．．へっ？」

目の前の鬼が喋り終える前に、私は奴の懐に入り込み、奴の右腕を斬り落とした。

「……もう話さずとも良い。貴様がどのような鬼か……どのような愚物な鬼かわかったのであるからな……」

「……随分と乱暴だね？でもね？こんなのに……え？なんで？治らな……い？」

なぜ治らない？そう言いたかったのだろうが、私の赫刀の斬撃を受けた者は鬼であってもそう簡単には再生は出来ない。例えそれが……上弦の鬼だったとしてもだ。

「冥府へ送る前に一つ聞こう。貴様は……貴様らはこの世の平穩を脅かして何が楽しい？人を……命を……この美しき世を脅かして何が面白い？」

「何だ？……似たような言葉をどこかで聞いたような……!!違う!こ

れは……無惨様の細胞の記憶……この男じゃないけど似たような男の言葉が浮かんでくる……この男は一体？」

「聞く耳も持たぬか……ならば死ぬが良い……」

「くっ……血鬼術【霧氷・睡蓮菩薩】!!」

私が刀を振り上げると同時に、奴は何やら巨大な氷の仏像のようなものを生み出した。……最後の足掻きといったところか？

「はは！キミって今まだ戦ってきた鬼狩りの中じゃ一番強かったけど、ここまでだね？俺がこの技を出して生きて帰った人間はいないんだ」

「……ならば私とその始めの一人となろう。……そして言うておくが、先ほどから出してる妙な氷の霧は私の赫刀の熱と私の体温で蒸発しているぞ？……無駄なことは止すのだな？」

「っ!!（そうか……だからこの男は呼吸を使っても問題なかったわけか……）」

私の放った言葉に奴は心底驚いたようだ。話していなかったが、私は戦いの場となると体温が三十九を超える。それは縁壹兄上も同じであった。それが何故かはわからぬが、いずれにせよそれが原因で先ほどからある霧は私の目の前で蒸発するのだ。

「それでも、この子は倒せないでしょ？ さっさと倒され……」

「造作もないであるな。……」 光の呼吸 【幻光一閃】！

音速を超える光速並みの速さで私は目の前の雪の仏像に接近すると、そのまま仏像の頸を撥ねた（何やら仏像が冷たい息を吹きかけてきたが結局効力は無かった）。目の前に仏像の頸が落ちてきた事実には、動揺と恐怖が混ざり合ったかのような表情をして見せた。

「嘘でしょ？ こんなあっさり……」

「死ぬがいい……愚物が……」

遺言を聞くまでもなく、私は容赦なく奴の頸を撥ね飛ばした。飛ばされた頸は地面にころころと転がると、やがて……塵となって消えていった。

「ふう……少し休むとしよう……」

奴が消えゆく様を見届けた私は、橋の近くにあつた切り株に腰を下ろし、暫しの休息を入れるのだった……。

「昌継さん！」

「……むっ」

しばらく休んでいると、村の方からカナエやその他の増援として来たと見える隊士達
がこちらに向かつてきていた。カナエは負傷のためか、他の隊士達に肩を貸してもらい
ながらゆつくりと歩いていた。

「あれ？あの鬼は．．．．．まさか？」

「うむ。少し前に滅したところだ。あそこにあの鬼の残骸があるであろう？」

「え？．．．．．ああ、確かに．．．．．でもまさか、本当に上弦の鬼を倒してしま
うなんて．．．．．」

私が上弦の鬼を滅した事実はどう反応して良いのかわからないのか、カナエも他の隊
士達も訝しげな表情を私に見せていた。

「上弦の鬼であろうが、鬼は鬼であろう？滅して何か問題があつたか？」

「問題はないですけど……そう言えるのは昌継さんだけですからね？……でも、この事実は鬼殺隊にとっては今までに類を見ないほどの功績です。胸を張って良いと思いますよ？」

「そんな大層なことは……いや、ここはその言葉を素直に受け取っておくでしょう……」

先ほどカナエに言われたことを思い出した私は、微笑を浮かべながらその言葉を受け取ることにした。そして、今回の件をお館様に伝えようと産屋敷邸に足を運ぼうとした時だった。村の外から誰かが勢いよくこちらに向かってくる様子が見て取れたのだ。

「姉さん!!姉さんはどこですか!?!上弦の鬼と交戦と言う知らせを受けてきたんですけど……」

「……しのぶ……」

「つ!!姉さん!よかった……無事だったのね……」

「ちよつと危なかつたけれどね？……でも、昌継さんが駆けつけてきてくれたからこうして生きているわ」

「……昌継さん？」

駆けつけてきたその女子は、私の名を呟きながら私の方へと視線を向けた。この女子は見る限り齡十半ばぐらいの年頃であろう。カナエと同じような蝶の簪を髪にこしらえ、どこかカナエに似たような顔つきをした女子に見えた。

「あなたが、昌継さんですか？」

「ふむ、私を知っているのか？」

「ええ。姉さんが良く、私に話してくれたので……。『私に稽古をつけてくれる強くて頼もしい剣士がいる』と」

カナエはこの女子に私のことをそのように話していたのだな。悪くはないが、あまり言いふらされても私が困るだけなのだがな……。

「そうか。……して、其方の名はなんと言う？」

「ああ、ごめんなさい。私は胡蝶しのぶ。このカナエの妹です」

「そうか、と私は納得をする。顔立ちも似ているのだが、尚且つ漂わせる雰囲気もまたカナエに瓜二つだったからだ。」

「すまぬな。其方の姉に怪我を負わせてしまった……」

「い、いいえ！謝らないでください！あなたのおかげで姉さんは助かったんですから！」

「そうですよ昌継さん？むしろ自分が稽古をつけていた花柱のことを叱ったって良いんですよ？『なんて情けない姿を！』と」

わたわたと慌てながら取り乱すしのぶと、どこか茶化すように喋るカナエに私は困惑するばかりだった。どうにも寿々以外の女子と喋るのは苦手だったからだ。

「叱りなどせぬ。むしろ謝りたいぐらいだ。もつと私が色々と教授出来れば、きつとカナエも……」

「だからそう自分を卑下にしないで下さい。ただ私に力が足りなかった……それだけですから！」

「……それで良いのか？」

「はい！」

カナエの瞳には一切の曇りが無く、どこか汚れものが落ちたかのような顔つきになり、以前よりもたくましく見えた。これを見るに私は今日のことと今後カナエは、さらなる進化を遂げるだろうと確信する。進化への道は厳しく長いものになることは間違いないが、カナエであれば必ず乗り越えられると信じるのだった……。

私は、その道が少しでも緩やかになるよう、手を貸すことにしよう……。

其ノ拾陸 帰参．．．そして新たなる戦いへ

「．．．．．童磨が負けたというのか？」

誰に語る訳でもなく、無惨は青い彼岸花の調査の手を止め、一人ポツリとそう呟く。

「あの首飾りの鬼狩り．．．．．あの者は確かに遠い昔に消した筈．．．．．だが、なぜ今はこうして私たちの前に立ちはだかる？．．．．．なぜ私たちを脅かすというのだ？これではあの化け物（キモノ）を相手にした時と変わらぬではないか．．．．．」

以前にも増して身体の震えが治らない無惨はその場に膝をついていた。前回の黒死牟の時は、惨敗はしたものの生きて戻ってきていたため、自身の恐怖も今程ではなかったのだ。だが、今回は違う。童磨は上弦の鬼の中では一番の新顔ではあるが、それでも黒死牟の次に力があるとされている“上弦の式”。その童磨が自分の元に帰ってくる

ありがとう、カナエ、昌継」

「いいえ……私はほとんど何もやっていませんよ。昌継さんがきてくれなかったら私はおそらく今この場にはいないでしょうから……」

「それでも、昌継がくるまでの間、必死でカナエは時間を稼いでくれたのだろうか？それは立派に任務を果たしたと言えるよ。だから、そう言わないでくれ……カナエ」

「……はい」

これ以上否定するのは失礼と踏んだのか、カナエは静かに平伏する。

「それと昌継。君には本当に頭が上がらないね。まさかこうも簡単に上弦の鬼を討伐してしまふなんて……。改めて君と共に歩める事が心強い事がわかったよ……」

「お館様と日の本を生きる人々のためであれば当然のことです……。何かありましたらいつでも参上致しますゆえ、いつでもお申し付けを……」

「ふふ……昌継は謙虚だね。うん、わかったよ。今後ともよろしくね？」

「御意……」

お館様の言葉に、私もカナエと同じように平伏をする。そして、その場は解散させられると、早速とばかりに柱の皆達が私とカナエの元に詰め寄ってきた。

「昌継！カナエ！すごいぞ！まさか上弦の鬼を倒すとはな！今の俺では絶対に無理だな！」

「嗚呼……カナエもよくぞ生き延びた。お前も成長したのだな……」

「昌継ウ！せっかくなきたんだから相手しろやア!!」

「昌継さん、カナエさん、無事でよかったね」

「ははは!!こいつは派手に驚いたな!やっぱおめーはすげーやつだぜ!」

「昌継さん!上弦の鬼の倒し方を教えてください!」

「俺もよければご教授を……」

「……………」

このように、ひっきりなしで来る柱達に私もカナエもさすがに辟易しきっていた。だが、こんな慌ただしい状況もなんとなくであるが、賑やかで楽しいものだと考えている自分がいたのだ。

「はは、これは時間がかかりそうですね……」

「ふつ……………だが、それもまた楽しいというものだ……………」

「そうですね……………」

二人で苦笑いを浮かべつつ、私たちはこの者たちの相手をするのだった……。

それから、さらに二年の月日が経った。あれ以来、私の名は鬼殺隊内に知れ渡ったよう
うで、なぜかは分からぬが隊員達から崇拜されるようになったのだ。中には私の“光の
呼吸”を教授してほしいと願ひ出てきた者もいたが、生半可な覚悟で会得できる程私の
呼吸は安くはない為、私が課す条件を乗り越えた時のみ、教授しようと話したのだ。そ
の結果、意外にも多くの隊士が残り、その者達に光の呼吸を教授することにしたのだ。
現在は、その者らは私の屋敷の庭で鍛錬に励んでいる。

「教えるのもまた修行。……これからどのようにしてあの者らに私の呼吸を教え
ていくべきか……」

任務を終え、屋敷に戻ろうとしている中私は今後の指導の仕方を考えていた。というのも、言ってしまうとあの者達が私の呼吸の全ての型を習得するにはかなりの年月が必要と考えていたため、少し指導の方法を変えようということにしたのだ。【光閃】や【輝月蓮華】などは比較的近い未来に習得はできるやもしれぬが、問題は【光天の舞】だった。この型は以前にも話した通り、光の呼吸の型の中でも随一と言っても良いほどの体得の難しさを誇っている。柱達でさえ習得には一月を要した。それでも完全なる【光天の舞】とは言えぬものではあつたが……。

「そこもまた、何やら考えておかねばな……むっ？」

そのような中、私は近くの山で妙な気配を感じとる。……この感じはおそらく鬼なのだが、妙に気配が今までに感じたものよりもずっと鋭く感じたのだ。……これはもしや？

「行つてみよう……鬼であれば斬るのみだが……」

辺り一面真っ白な雪景色で未だなお降り続ける雪の中、私はその妙な気配の正体を探

るため、件の山へと足を踏み入れるのだった……。

登場人物紹介

登場人物紹介

【継国家】

継国昌継

本作の主人公。24歳。本来は戦国の世で生きていた侍だったが、無惨が派遣した鬼の力によって妻である寿々と娘である可奈と共に未来へと強制送還されてしまう。兄である縁壺や巖勝のことを深く慕っており、その二人の影響を受けて自分も剣術を学ぶようになる。それによって自らの呼吸〔光の呼吸〕を会得に成功し、鬼達を呼吸を用いて討伐している。縁壺同様に額にあざがあり、戦いの場となると体温が三十九を超えている。情に厚く、心優しい一面を持つているが、家族や仲間を容赦なく傷つけたりするもの（特に鬼）には一切の容赦無く成敗する。また、自身を低く見積り過ぎていて卑下にする事が多々ある為、度々カナエや寿々に咎められている。鬼殺隊の柱達にしばしば稽

古をつけているためか、柱達との関係は非常に良好で、よく自身の屋敷に招いて食事などをすることもあるそうだ。

継国寿々

昌継の妻。21歳。鬼に両親を殺され、自分まで鬼に喰われそうになっていたところを昌継に助けられた女性。それ以来昌継と共に生活していくことになり、自然の流れで夫婦めおとの關係に。元々は寿々も町へ働きに出ていたのだが、娘の可奈を産んで以来働くことをやめ、子育てと家事に専念することとなる。昌継のやることなすことに特に口を出す事はせず、“昌継の思つた通りであることをすれば良い”と言ひ聞かせている。それは未來に飛ばされてからも同じで、昌継が鬼狩りを続けると言つた際にも寿々は静かに肯定した。穏やかな性格で口調も柔らかい。だが、間違つていると思つたことにははつきりと自分の意見を言うと言う強い一面もある。

【鬼殺隊】

産屋敷輝哉

鬼殺隊第97代当主。23歳。隊士達からは「お館様」と呼ばれ、鬼殺隊の剣士たちを「私の子供達」と呼ぶ。

代々短命の一族で病に冒され、顔面上部の皮膚が変質している。さらに時間の経過とともに病が進行し、身体が衰弱している。「我と個性が強すぎてまとまりがつかない」「柱」達も、全員が彼を心酔し敬っている。昌継のことは自分と同じ志を持つ仲間として認識しており、他の隊士と同じような扱いをしている。

煉獄杏寿郎

【炎の呼吸】を扱う炎柱。20歳。古くから継承されてきた炎の呼吸を遺憾無く使い鬼を狩ることで、柱へと上り詰めた若き剣士。情熱的で仲間思いの一面があり、仲間の窮地には真っ先に駆けつけるほどに心が優しい。昌継とは師弟に近い中で、普段からよく昌継から稽古をつけてもらっている。原作よりもかなり腕を上げていて、上弦の鬼相手でも遅れを取らないほどの実力になっている。

胡蝶カナエ

【花の呼吸】を扱う花柱。21歳。穏やかで心優しい性格をしており、誰に対しても優しく接する。鬼殺隊員としては異端な『鬼と仲良くする』と言う考えを持ち合わせていて、周りの隊士からは色々と言われている。上弦の式の鬼である童磨と交戦になり、童磨の圧倒的な力の前に屈しようとしていた折に、昌継に助けられ命を落とさずに済んでいる。その件で、自分に力が足りないことを自覚したカナエは、昌継に鍛えてほしいと懇願する。それもあってか、カナエの実力は歴代の柱と比べてかなりのものとなっている。

宇髄天元

【音の呼吸】を扱う音柱。23歳。“派手に”と言う言葉をよく口にし、顔を男ながら化粧をしている変わった剣士。昌継の腕と人間性に心底惚れているため、よく付き纏っていることもあってなんだかんだ昌継と一緒にいる事が多いのは天元だ。もちろん稽古もつけてもらっている。実力は原作よりもかなり強め。

時透無一郎

【霞の呼吸】を扱う霞柱。14歳。当代最年少の柱であり天才と呼ばれている。双子の兄である有一郎もまた柱では無いものの、無一郎に近い実力を持っている。昌継の兄である巖勝の子孫だが、本人はそれを特に気に留めていない。昌継とであって以来、人のために戦うことが何より大事と考えられるようになった事で、原作よりはかなり人間性が出ていて、熱い部分も出るようになっていく。昌継の稽古を施してもらっているため、実力もメキメキと上達している。

悲鳴嶼行冥

【岩の呼吸】を扱う岩柱。27歳。僧侶のような格好をしており、最年長ということもあって柱をまとめる立場となっている。盲目だが体格と腕力は柱一のため、昌継が来る前までは鬼殺隊最強と言う肩書をもらっていた。昌継が来てからは自分よりもさらに至高の域にある昌継に呼吸の仕方などを教授してもらい、自身の呼吸や腕力などをさらに鍛え上げることに成功した。つまり、原作よりも強くなった。

不死川実弥

【風の呼吸】を扱う風柱。21歳。短い白髪をした青年で、傷跡が身体中にいくつもあ
る。非常に粗暴で苛烈な言葉が飛び交うのが目立ち、鬼への憎悪と敵意は他の柱と比べ
るほどに無いくらいに強い。どこから来たかもわからない昌継のことを最初は毛嫌い
していたが、彼と触れ合い、稽古をしていくうちに人となりを理解したのか、今となつ
ては互いに食事をするほどの中になっている。実力は上がってる。

錆兎

【水の呼吸】を扱う水柱の一人。21歳。獅子色の髪が特徴的で、右頬に大きな傷跡があ
る。厳しい一面を持ちながらも正義感が強く、優しい性格の持ち主。最終選別の際、異
形の鬼と出会すも、昌継との稽古と、同じ同志の義勇の力もあつてか、無事に討伐する
ことに成功し生還を果たす。その後は破竹の勢いで階級を上げていき、見事に柱の座に
つくこととなった。昌継のことは今でも深く慕っており、よく“光の呼吸”を教えて欲
しいと懇願しに行つてゐるが、未だに承諾はされていない。

富岡義勇

【水の呼吸】を扱う水柱の一人。21歳。常に冷静で感情をあまり表に出さず言葉数も少ないため、周りからは誤解されがちだが、本人は特に気にしていない。同じ水柱である錆兎と仲が良く、彼と話している際のみ、僅かだが頬が緩む事があるのだそう。錆兎が生還していることもあって、原作にあつた自己嫌悪や劣等感などは一切無く、心の闇も無いクリーンな状態となっている。師として認めている昌継には尊敬の意を示し、度々稽古をつけに彼のもとに赴いている。実力はかなり上がっている。

結論

柱たちが上弦クラスの鬼と戦っても対等に戦えるレベルへと成長した。

原作編

其ノ拾漆 激闘 継国昌継 対 鬼舞辻無惨

私はその山に足を踏み入れる事数分、足がすつぽり埋まりそうなほどの雪をザクザクと踏みしめながら、私は山の中を散策していた。先ほど感じた妙な気配は、未だに感じられるのだが場所までは分からぬため、こうして目を凝らしながら異常がないか調べているのだ。

「気配は感じられる……だが、どこから……? ……むつ? あの家は……」

そのような中、私の眼に一つの家が映った。少し離れた位置にあり、雪が降っていることもかなりまばらだが、確かに家がある事がわかる。私は、この山のことで、何かこの辺りで異変が無かったかを聞こうとその家に向かおうとしたのだが、その家に近づくとつれて徐々に……。

「………気配が強くなった。そうか、あそこに………」

鞆に手を掛けながら、私はそう呟く。あの家にはその鬼の気配の他に“数名”の人間の気配を感じ取られた。どうやら鬼に喰われているという状況で無いとわかり少しホツとする。だが、その鬼の気配的には………鬼であるのは間違い無いのだが、どうにも今までの鬼とはどこか違う気配を感じ取れた。今まで感じた気配とはずつと………濃い気配だったのだ。

「あの家の住人が心配であるな………。無事であれば良いのだが………」

鬼がいる以上、その家の住人の命があるという保証は一切ない事は私も重々承知。だが、僅かでも生き残りがいるという可能性もあるため、私は駆け足でその民家へと赴いた。

「もし、誰かおらぬか………。………。っ！」

扉が開いていたため、顔を覗かせる形で私は中にいる者に声をかけたのだが、中の

その光景〃を見た途端・・・・・・・・・・刀を抜いた。

「貴様・・・・・・・・その女子に何をしているのだ？」

「む？・・・・・・・・ほう？ここら辺りに人の影は見当たらずと思っていたのだがな？で、何をしている・・・・・・・・であつたな？みてわからないか？この娘に〃私の血〃を与えているところだ。私は今、鬼を増やすことに尽力しているね？こうしているいろいろなところで人間どもを鬼に変えているところなのだ・・・・・・・・まあ、半分以上は私の血に耐え切れずに死に伏したがな？」

「鬼を・・・・・・・・増やすだと？・・・・・・・・つ！！まさか、貴様は！！」

「ふふふつ・・・・・・・・そうだ、鬼狩りよ。私こそ、鬼の始祖、鬼舞辻むぎ・・・・・・・・」

「貴様を成敗する！！覚悟せよ！！」

私は目の前の鬼が・・・・・・・・鬼の始祖、鬼舞辻無惨だということに確信を持つと、奴

が話していることも厭わず、すぐさま斬りかかった。縁壺兄上でさえ、仕留めきれなかったこの男に私がどれだけのことをできるかは知らぬが、ここで会ったが以上対峙する他なかった。

「っ！随分と荒い鬼狩りだ。．．．．．面白い！」

「．．．．．むっ？躲されたか．．．．．っ！（此奴．．．．．心臓が7つも．．．．．）」

私の攻撃をすんでのところで躲した無惨は、そのまま家の外へと出る。その際に、私は無惨の体を観察すると、驚くべきことに無惨には心臓が7つもあるということに気付く。つまり、一つの心臓を潰したところで、奴は死なずに活動を続けるということになるのだ。それに加え、鬼特有の再生能力もある故に、時間が経ってしまうと潰した心臓も元に戻ってしまう。おそらく、頸を斬り落としたところで此奴は死にはしないだろう。．．．．．なるほど、縁壺兄上が仕留め損なうのもわかるというものだ。

「フハハ！どうした？来ぬのか？ならばごちらから行くぞ!!」

「ふっ……ならば、再生する暇すら与えずに仕留めるだけのこと！光の呼吸【光天の舞】！」

無惨が自身の爪を私に向かつて振り回してくるが、私はその攻撃を【光天の舞】でいとも容易くいなしながら、一瞬の隙をついて無惨の右腕を斬り落とした。

「むっ……ほう？幾分かやるようだな貴様は……。貴様、名を何というのだ？」

「鬼に語る名などありませんが……冥府へ送るついでに聞かせておくのも悪くは無いですな……私の名は継国昌継。大昔に貴様を追い詰めた継国縁壺の弟である」

私が、名乗りを上げると同時に、無惨は何故か元々青白かった顔をさらに青くし、妙に震え上がった……？私が何かしたのか？

「き、貴様……が？貴様があの首飾りの男だと言う……のか？」

「首飾り? もしやこれのことか?」

そう言いながら私は服の中に隠すようにして首から下げていた勾玉を無惨の前に差し出す。それを見た無惨は、ますます震えを大きくしながら私のことを見据えていた。

「やはり貴様 が」

「もはや口にすることは何も無い。鬼舞辻無惨! 貴様はここで私が仕留める!」

「くっ」

何やらまだ何か口にしそうな雰囲気をしていたが、もはや鬼と語ることなど何もなかった私は、すぐさま此奴を討伐するべく行動を移した。

「参る」
“光の呼吸” 【幻光一閃】!

「なつ……この素早さは……あの耳飾りの男以上だと!?ば、馬鹿な……」

「頸を落とされても口を開けるとは流石であるな。流石鬼の始祖というだけではあるな。だが、その口もすぐに聞けなくさせてくれよう……ふっ!」

呼吸で無惨の頸を落とし、その際に心臓を三つほど潰した私は、残りの心臓も全て潰すべく追い討ちをかけに向かった。

「光の呼吸」 【光閃】! 【円光遮断】! 【照魂刺突】!

「ぐっ……ぐわっ!!……ば、化物め……」

「鬼である貴様に言われたくは無い。さて……四肢や頭部に存在していた心臓は全て潰させてもらった。……残るはその貴様の胸にある心臓で最後だ。……覚悟は良いか?」

私の度重なる追撃により、無惨はまさに見るも無惨に、両手両足を切断され、頸も雪

が積もる地面に転がったまま放置状態に陥っていた。7つあった心臓も残りは一つというところまで追い詰め、後はとどめを刺すというだけなのだが、私はそこで『ようやくこの日のもとに平穩が訪れる』と一瞬であるが不覚ながら気を緩めてしまったのだ。その一瞬が、無惨にとっては、十分すぎる時間だということに……。

「私はまだ死ぬわけにはいかないのだ！貴様らに二度も邪魔されてなるものか!!」

「っ!!」

無惨がそう叫ぶと、その直後に何やら“食い絞められた奥歯が軋むような音”が聞こえてくる。すると、その途端に無惨の身体が一斉に弾け飛び、肉片が彼方此方へと四散して行つた。

「させてなるものかっ!!」

逃げられるっ！そう悟つた私は、二千近くにバラけながら飛び散ってくる無惨の肉片をその場で無我夢中で斬り伏せていった。だが、肉片には私にも斬れぬほどの小さな肉

片なども多数存在していたためか、肉片全てを斬り伏せることは残念ながら叶わなかった。……おおよそではあるが、千八百程の肉片を斬り伏せることは出来たが、残りの約二百の肉片は何処かへと飛び散って行ってしまったため、もう斬ることは出来なさそうであった。……無惨の濃い鬼の気配はここら辺りから消え失せたが、奴があこの程度で死ぬほどやわな存在でないことは先程の戦闘で理解できた。……つまり。

「逃げられた……。か。ふむ……。そうか、おそらくであるが縁壺兄上も同じような手法で無惨を取り逃したのであろうな。……私もまだまだ未熟であるな」

無惨を取り逃したことに酷い罪悪感を覚えながら、私は今まで放置していた先程の家まで戻ることにしたのだった。

其ノ拾捌 妹の変貌

先程の家まで戻ってきた私は、兎にも角にも家内の者の身の安全を確認しなければと踏み、中へと入った。だが・・・中に入ると違和感を覚えた。見たところ、女性が一人と、その子供たちが複数人いることが確認出来たが・・・あの“鬼舞辻無惨に切り裂かれ、血を与えられていた女子”の姿が見えないのだ・・・。

「一体どこに・・・？」

「あ、あの・・・さ、先ほどは助けて頂き、有難うございました。おかげで助かりました・・・」

「む？・・・それは何よりである。・・・して、少々聞きたいことがある。先程の女子は何処に？」

「女子？もしかして、禰豆子のことですか？・・・禰豆子は今、炭治郎が麓の医者

に連れて行つてるところです。．．．．あのままでは、そのまま死んでしまいそうでしたので．．．．．」

その女子の母親と思わしき女性は、そう言いながら小さく震えていた。無理も無い．．．．自分の娘が死するやもしれぬこの状況なのだから。私も、もし可奈がその禰豆子(?)とやらと同じ状況にあつたとするなら、冷静になどいられなかつただろう。

「炭治郎とは、其方の息子であるか？」

「はい。ちょうど炭売りから帰つてきたところで、血塗れの禰豆子の姿を見て、大急ぎで麓まで駆け降りて行きました」

．．．．？だが、待て。もしそれが本当の事だとすると．．．．．つ
！炭治郎が危うい！

「つ！しばし待たれよ！すぐに戻る故！」

「つ？は、はい！」

確認をとった私は、すぐさまその炭治郎の後を追った。幸いにも、足跡がまだ残っていたため、追うには容易かった。だが、問題はそこでは無い……。

「(むう……私が向かうまでに、“鬼”になつてないと良いが……)」

そう、私が懸念している問題がまさにそれだった。鬼舞辻無惨に血を与えられ、生き延びていると言うことは、その女子の向かう先は一つ……鬼への変貌しかなかった。時間的にも、いつあの女子が鬼になつても不思議では無い。鬼になつてしまえば、生身であろう炭治郎などすぐに喰われて終わりとなつてしまう……それだけはなんとしても防がねば！

「くう………禰豆子、安心しろ。兄ちゃんが必ず助けてみせるからな！」

オレの背中で血塗れとなつて意識を失っている妹の禰豆子にそう優しく囁く。オレ、竈門炭治郎はさつきまで麓の村まで炭を売りに行つていた。だが、帰るや否や、血塗れになつた禰豆子が倒れているわ、家がボロボロにされているわ、正直色々ありすぎて頭の中が混乱している。幸いにも、母さんや他の兄弟たちは無事だったけど、禰豆子が無事でなければ意味が無い。だからオレはこうして、禰豆子を担いで麓の医者にまで歩いているんだ。それにしても………いつたい誰があんなひどいことを………つ

「うっ………ぐうっ………」

「禰豆子っ!?!気が付いたか？」

「ううう………」

意識を取り戻した禰豆子にオレは喜びを覚えた。……だが、どうにも禰豆子の様子が不自然に映った。なんだろう？この匂い……。禰豆子の匂いは勿論するんだけど、それと同時に違う妙な匂いが……。

「うがああつ〜!!!!」

「つ!! 禰豆子、暴れるな！傷が開くぞ!!」

「がああつ〜!!!!」

オレの声が届いていないのか、禰豆子は暴れるのを止めようとはしなかった。むしろさらに暴れると、オレの背中から雪の道へと転げ落ちていった。

「禰豆子！どうしたんだ!?!」

「うう〜……」

やっぱり妙だ……。普段の禰豆子とは思えない程に落ち着きが無い様子だし、それにこの禰豆子にまとわりつく妙な匂い……。絶対におかしい！禰豆子に何が起きてるんだ！

「があっ!!!」

「待て、禰豆子っ！（くっ……。下が雪だから、思うように動けない!）」

今度はオレに向かって掴みかかって来ようとする禰豆子。オレはなんとか躲そうとしましたが、足場が雪で糠っていたため、その場で態勢を崩してしまった。……。ま
ずいっ！

「させるかっ!」

「……。へっ?」

やられるっ! そう思った時だった。どこからともなく現れた、宍色の髪をした人が、

オレを抱えて飛び退いて、禰豆子の攻撃から守ってくれたんだ。この人は？

「義勇！こっちは問題ない！お前はそこの鬼を仕留めろ！」

「ああ、任せろ」

「ま、待つてください！」

もう一人現れた、黒髪の人が、刀を片手に禰豆子を斬り捨てようとしていた為、オレは抱えられながら必死に引き止めた。

「オレの妹なんです！だから、殺さないでください！」

「残念だが、こいつはもうお前の妹では無い。．．．．ただの、鬼だ」

「．．．．はっ？」

黒髪の人が淡々とそう言う。……言っている意味がよくわからなかった。あれは、紛れもなく禰豆子だ。間違う筈もない。なのに……どうということなんだ？

「おそらく、傷口から鬼の血が体内へと入ってしまったんだろう。そうやって仕舞えば、人は人を喰らう鬼へと変貌する。鬼になって仕舞えば、“現段階”では元に戻す事は不可能だ。だから、今できる最善の対処は……この鬼を今この場で仕留めることだ。それが、俺たちの仕事でもあるからな」

「待って下さい！禰豆子は人を喰っていません！喰おうとしても、オレが引き止めます！だから、どうか妹を助けて下さい！」

「つい先程まで、お前自身が喰われそうになっていたのに、よく言えたものだな？……
錆兎」

「ああ……」

オレを雪道にそつと降ろした穴色髪の方は、そのまま刀を抜いて禰豆子へと迫っていった。まずいつ！このままだと禰豆子がつ……。今のオレにできる事は……。これしかない！

オレは冷たい地面に額と両手をつけた。。。。。

「お願いします！妹を殺さないで下さい！！どうか。。。。お願いします。。。。」

心からの懇願に、オレの瞳から涙が溢れ出てくる。。。。。頼む。。。。。禰豆子をどうか助けてくれっ!!

「錆兎。。。。。」

「はあ。。。。。義勇、お前はこの鬼を見張ってる」

どこか呆れたような声でそう言った穴色髪の方は、刀をしまうとオレの元まで歩み

寄ってくる。……助けて、くれるのか?……と思った、その時だった。その人は、オレの髪を乱暴に掴み上げると、オレをそのまま力一杯近くの木へ投げ飛ばした。

「がはっ……な、何を……」

「男なら、何故俺たちに向かつて来ない! 妹が危機に晒されてると言うんだぞ!! そんなところで惨めにうずくまってる暇があるなら、俺たちから妹を守って見せろ! それが兄であり、男であると言うことではないのか!!? 情けない!!」

「……っ!!」

「俺たちが人間であったからまだ良かったものの、相手が鬼であったのであれば、貴様はどうに殺され、喰われていたんだぞ!! 鬼どもに情や情けなど微塵もない! 女子供であろうと容赦なく喰らい尽くす! それが鬼だ! もちろん、貴様の今言った願いや意見が、鬼どもに尊重されると言うことも断じて無い! 当然俺たちだって貴様のことを尊重したりしない! それが現実だ! それを否定したのであれば足搔け! 食らいつけ! それが

出来ぬのであれば今世で生きながらえることなど出来ん！妹を殺されかけて何が『助けて下さい！』だ？笑わせるな！恥を知れ！！」

「っ……っ……」

その口から出て来る次々の言葉に、オレは言葉が出なかつた。……そうだ、オレは何をやつてたんだ。妹が殺されるかも知れないんだぞ？それを……何でオレはまるで愚者みたいにこの人たちに縋っているんだ……この人の言う通りだ。なんて情けないんだ、オレは……

「義勇！その鬼を殺せ！」

「やめろーっ!!!」

気がついた時には、オレは懷に忍ばせていた斧を手に取り、禰豆子を救出するべく、二人へと斬りかかっていた……。

待ってろよ、彌豆子。兄ちゃんがきつと、助けてやるからな………！！

炭治郎の決意

鬼である妹を助けようと、必死に俺たちに向かつてくるこの目の前の少年。勿論、来られたところで俺や義勇には及びもしないだろうから、俺たちは特段気にする事もなく対処した。

「甘い。そんな気迫で俺たちを倒せるとでも思ってるのか？」

「くっ！ 禰豆子を離せ！」

怒りそのままに向かつてくる少年だが、その姿勢はまさに猪突猛進。躲しつつ、こいつの対処をするのは最も容易いものだった。何せ、普段から鬼との戦闘に向けた厳しい鍛錬をしている俺たちだ。こんな少年、赤子の手を捻るよりも簡単に、いなすことが出来る。

「吠えるだけか。はあ……もう、大人しくしろ」

「くっ………そっ………」

これ以上相手をしたところで時間の無駄と察した俺は、この少年の鳩尾に一撃を加え、動きを止めさせた。

「っ!?!………ぐっつ………がああっ!!」

「っ………何だ、急に暴れっ………っ!しまった!」

少年の妹を取り押さえていた義勇だったが、いきなり暴れ出した妹に拘束を解かれてしまったようだ。拘束から逃れた妹は、我を忘れたまま蹲った少年の目の前に猛烈な勢いで迫ろうとしていた。

「させると思って………っ!………何だと?」

少年が喰われる前に、頸を切ろうと刀を抜いた俺と義勇だったが、次に出た“その妹

の行動”に面を喰らった。

「うう………」

「つ！禰豆子………?」

その妹は、鬼になったのにも関わらず、まるで兄であるあの少年を守るかのようにして、俺たちの前に立ち塞がったのだ。無論だが、誰でも鬼と化せば、例え相手が肉親であろうと兄妹であろうと友人であろうと、何の躊躇いもなく襲い掛かろうとし、最終的にはその肉を食い尽くす。これまで、俺たちはその光景をいくつも嫌と言うほどに見てきた。……今回も例に漏れず、それに慨ずると思つていたのだが………一体どう言うことなんだ？

「錆兎………どう見る?」

「わからない。だが、どうであれ鬼である事に変わりはない。俺たちの任務はただ一つ………この目の前にいる鬼を始末することだ!」

「………そうか」

どこか不満げな表情を浮かべた義勇だが、俺は気にせず刀を向けた。

「行くぞっ！」

「ま、待ってくれっ！頼むから彌豆子だけはっ!!」

「吠えるだけでは何も守れないって言っているっ！妹を守りたければ、己の身を曝け出
てでも止めに入って見せろっ！」

俺は少年に檄を飛ばすが、俺の一撃が相当効いていたのか、起き上がれそうになかつた。………ここで起き上がっても来さえすれば、俺も少しは考えを改めたかも知れないが………まあいい。これで………終いにするっ！

「はあっ!!」

俺の横風の一閃が、鬼の頸にせまる。……あともう少して頸を刎ねる……
そう思った時だった。

(ガアキイイインツツ
!!!!)

俺の刃が、すんでの所で何者かに止められた。しかも、同じ日輪刀で……。義
勇は俺の背後にいるため、義勇であるはずは無いのは明白。……では、一体誰
なのか? ……それは。

「錆兎・・・・・・・・しばし待て」

「っ！昌継・・・・・・・・さん？」

何故か、この場にいた俺の師でもある昌継さんだった・・・・・・・・。

「錆兎・・・・・・・・しばし待て」

「っ！昌継・・・・・・・・さん？」

鬼と化した禰豆子を滅するべく刃を振り翳していた錆兎に対し、私は刀を抜きつつ咄嗟に割つて入り……此奴の剣を受け止めた。

「錆兎、義勇。すまぬが、この鬼と炭治郎には少々話がある故、少し時を貰つても構わぬか？」

「その女は鬼ですよ？一刻も早く仕留めないとその少年が危険に晒されます！」

「安心するがいい。……もし、この鬼が炭治郎を喰おうと動いたならばすぐさま頸を刎ねる。であるからして、ここは私に任せてはもらえぬか？」

「……………」

少し納得の言っていない様子の二人だったが、最後には渋々と言つた形で刀を収めてくれた。それを見た私は、軽く会釈をした後で改めて鬼と化した禰豆子へと視線を向けた。

「うううう……」

「(やはりこうなったか……。だが、この女子……。まるで炭治郎を守るかの様にして……)」

「くっ……。だ、誰かは知りませんが、お願いですから禰豆子を……。妹を殺さないでください！お願いします！」

後ろで倒れている炭治郎は、私に媚びるように妹を殺さないように願ってくる。私とて、できれば殺したくは無いが……。仕方ない。

「ふっ……」

「っ!?!がっ……」

私は一瞬にして、禰豆子の背後に回り込むと、首筋に一撃を入れて意識を刈り取った。いつ暴れ出しても不思議ではなかったのだ、今はこうしておくべきなのだ。

「っ！禰豆子！」

「安心するが良い。少しの間眠って貰っただけである」

そう静かに口にした私は、倒れた禰豆子を近くの木にもたれ掛からせると、そのまま炭治郎の前に立った。

「炭治郎よ、其方に聞きたい。其方はそんなボロボロになりながらも、何故に鬼となった妹を生かしたいと願う？鬼となった者は肉親であろうと兄妹であろうと、関係なく喰おうと凶暴化するのだぞ？」

「でも、だとしても家族である事には変わりはありません！家族を助けたいと思って何が問題なのですかっ！」

「助ける？……其方がどのようにしてその妹を助けるといふのだ？鬼から人間に戻すような手段は存在しないし、何の力も持ち合わせていない其方が？」

「……………」

その言葉には、炭治郎は口を紡いだ。鬼から人間へと戻す薬は、珠世が開発の途中だが、それがいつ完成するかは定かにはなっていない。だからこそ、救いようが無い鬼は斬るべき所なのだが、幸いにも禰豆子はまだ人は喰っていないので留まっていた……あくまでも、今は……………」

「其方が言うように、その禰豆子を生かして、その矢先に禰豆子が罪なき人間を喰らったらどう責任を取るつもりだ？……………」例えるならば、其方の家族。其方の家族を禰豆子が全員喰らった場合、其方はどうする気であるか？」

「禰豆子が……………」家族を……………」そんなことする筈……………」

無い！……………」とは言い切れなかつた様子。炭治郎は、しばし何かを考えるように俯く。この判断の遅れは非常に難点だが、私であるなら即刻その場で禰豆子の頸を斬り、自分も自害するだろう。

「私たちは、“鬼殺隊”というその禰豆子のように鬼と化した人間を狩る組織に身を置いている」

「鬼殺隊……?」

「その組織の関係者が今、“鬼を人へと戻す事が可能となる薬”を作っている最中である。もしも、この禰豆子を私たちに預けることを了承するのであれば、禰豆子を人間に戻す事を保証しよう」

「っ! 本当ですかっ!」

妹を人間に戻せる可能性が少しでもある事に希望を見出したのか、炭治郎は途端に顔が明るくなる。

「昌継さん!? 何を勝手な事をつ!」

「すまぬ。私としても、勝手な事を言っているというのは重々承知である。だが、私はこの鬼……禰豆子には何か、今後を左右する可能性のような物が感じられるのだ」

「可能性……?」

「聞くが、今まで其方らが見て来た鬼で今の禰豆子のように、人間を庇うような行動をとる輩はいたか? 肉を欲する事もせず、ただただ人を守るべく立ち向かうとする鬼を見た事はあるか?」

「……………」

私の問いに二人は、言葉を発する事はなかったがその代わりに首を小さく左右へと振る。

「私とて、このような鬼は見た事がない。なればこそ、この禰豆子を珠世に預けさえすれば、珠世の研究は捗る可能性が高い。〃 鬼を人間に戻すことを可能とする薬〃 が出来る時間が短くなる事を意味しているのだ。故に、私はこの禰豆子を斬る訳にはいかぬ」

「本当にそれだけの理由ですか？その鬼を斬らぬ理由は？」

錆兎が訝しむように、私の問いかけてくる。

「……………どうにも、重なってしまつてな。この炭治郎と私が」

「っ？この少年と昌継さんが？」

「うむ。私には尊敬する二人の兄がいたのだ。一人はもう亡くなられて終われたが、もう一人は今もお生きている」

「え？昌継さんって、400年以上も前の時代から来たのですよね？そんな前の時代から生きているあなたの兄上とは……………まさか？」

「……………私が尊敬した兄は、悪しき鬼へと変貌されていた」

私の暗く重いその言葉に、二人は口をつぐむ。

「私はこの鬼殺隊に入る前、実は鬼となった兄と対峙した事があったのだ。その時は、私もこの炭治郎同様に酷く慌てふためいたものだ」

「お館様が『昌継は上弦の壺の鬼を撃退した事がある』と仰られていましたが、もしかしてその上弦の壺が……」

「……私の兄である」

私の実の兄が鬼。その事実二人はいよいよ驚きを隠せなくなっていた。

「私は、出来れば兄上を元の人間へと戻したいと考えているのだ。これ以上、兄上と刃を交えたくなかないのでな？」

「ですが、その鬼が人間に戻りたいと願っている保証は……」

「兄が何故に鬼へと墮ちたかは大方の見当がついている。故に、今度会った時にこの件について話し合ってみるつもりだ」

淡々と口にする私は、続け様に二人に対してゆっくりと頭を下げた。

「この件については私が全責任を取る。お館様にも他の柱達にもしつかりとした説明をするつもりである。錆兎、義勇よ。私の顔に免じて、今回は見逃してはくれぬか？」

「……………そこまでされては、もう断れる訳が無いじゃないですか？……………義勇はどうだ？」

「俺も、この鬼には他の鬼には無い異様な雰囲気を感じていた。……………俺も、昌継さんの意見を尊重します」

「かたじけない、二人とも」

二人から了承を得た私はほつと息を吐くと、炭治郎へと視線を移す。

「炭治郎よ。禰豆子の事は私達に任せ、其方は家へと戻るのだ」

「あ、ありがとうございます。それで、その……一つ頼みを聞いてはくれませんか？」

「……………」

頼みを聞いて欲しいと話す炭治郎の顔つきは、どこか覚悟の決まった凜々しい顔つきになっていた。

「オレも、禰豆子を人間に戻す手伝いをしたいんです。オレを鬼殺隊に入隊させて下さい」

「よせ。お前の様な非力な子供が入ったところですぐに鬼に喰われて終わりだ。お前の妹は約束は出来ないが、できる限りに手は尽くす。だから、お前は家に戻って平穩にくら……………」

「家族がこんな酷い目に遭つてるのに何もせずにはいられないんです。自分の身は自分で守ります！力だつて付けます！だから、どうかっ!!」

錆兎がその頼みを断ろうとしても、この炭治郎は断固として譲る気は無さそうだ。私としても、炭治郎には助かった家族と共に暮らして貰いたいが、本人がこう言つてる以上これ以上断つても無駄だろう。

そう判断した私は、ゆっくり口を開く。

「あいわかつた。その其方の家族を想う強い気持ちがあれば、鬼どもにも遅れをとる事はないであろう」

「っ！では……！！」

「鬼殺隊に入る事を認めよう」

炭治郎の顔がみるみる明るくなる。

「いいんですか、昌継さん？ 言いたくないですけど、あの少年は今のままではとても……」

「私が炭治郎の稽古をつける。幸いにも、ここ最近鬼の活動は酷く落ち着いている。時間は十分に設けられる」

「ま、昌継さん直々の稽古……？」

炭治郎には私が指南する。その旨を伝えただけなのだが、何故か二人は顔を引き攣らせていた。

「(どうする、義勇？ 昌継さんの稽古は……)」

「(……柱の俺たちでも、根をあげそうなくらいきつい)」

二人が何を考えてるのかはわからないが、そんな二人は放っておいて炭治郎にもその事を伝えておいた。

「よろしくお願いします！」

炭治郎の元気な声が山中に響き渡る。これは、私も久々に指南に力を入れるのも悪くないと軽く肩を鳴らすのだった。

「……………あの少年が稽古中に死なない事を祈ろう」

そんな二人の声は、強く吹いた山風によって掻き消された。